

堅くはねりし
もは水をし
いねるへも
柔なるはし
かたなるは
らたなるは
りたなるは

もらひみるへし必高く成居へし其高きものかいから骨より下にある者も
上にあるもありみなはらのこりのあらはるゝ也其類みな筋の病にて中風
疝積などの類に追而變するもの也われこの頃筋のことを穿鑿してみるに
しるしありおさと大に悦服して専夫をなして大に効あり其こと板本にせ
しもの大にわか偽ならぬこと符合しておさと幾之進に遣すとて買たり同
人の定而遣すへし一覽あるへし我を笑ひしもの共わかことを筋左衛門な
とゝ異名し人間の身は其ことくからくりのことくあやつり人形のことき
ものにあらずとあさみ笑ひしもの共此ほと追々閉口したる也大事の事也
忠孝の力くさ也よく御こゝろみあるへしわか齒のこと御尋忝候とくに平
日の如し○醫者は中氣を痲症といひ痰といひ疫邪を入念たる風といふ類
常のこと也馬鹿をよき人といふの類也油斷すへからさる也○天海の歌忝
候歌のうち屁はいとやすく朝起龜食も出來申候され共氣のたたり六ヶ敷
候たらりと等は閑なるにはあらず寛大にして行つたらぬ事と覺候此こと

は宴仲か
毒管仲は
ないひた
六ヶ敷の
きり也
何にても
たるは
楊朱墨翟
仁と義を
學過たる
にと過る
に不仁不
孟子は禽
に子は禽
かたは禽
即過たる
悪也

万事にかよひ第一のことなれ共流れすして寛大なるは書經にいふ直にし
て温寛にして慄の味にして六ヶ敷のかきり也別番院家地の取扱などにみ
な通することにも書狀一覽已來くらきところにもふし穴より日のさすほと
の力を得たりかたしけなく候新右衛門日記に内氣のたたりといふ所よみ
かね候間兼而覺の所を以しする也上野などにたしか成なるものはあらは
追而御聞かせ可被下候○日々弓術御出精のこと感服々々馬弓よきこと也
御懈怠あるへからす弓に強き弓を引ことよからす夫も尤可恐はくせあ
る馬にのるへからす遅くともつまつかぬ馬にのるへしさて足場のあしき
わきに大みそ或はがけ馬の丈ほと杭なとある所乗へからす以之外なる
事也逸平次殿の書に驥は其力を稱せず其徳を稱すといふことを常に證と
せられ唐太宗の拳毛騮の圖に疵の十余ヶ所あるといふにてもくせ馬を少
ものるへからさること也なら奉行を本多飛彈守長崎奉行を松平石見守み
な手にかちたる馬にのり落馬して即死也足利將軍家のうち落馬して卒去

の人あり可恐事也たしなみ藝と専らにするとの差別ありわれ常に其ことを守る也奈良の馬場は左右土塀前後と南は三間以上之土手也最上の馬場にてかけ出さるる事も横へきることならぬ所にもかゝることありし也馬にのるもの脇差のとめ必あるへし平日懐中にかけて外しの子とめ二ツこしらへ入置へし雲霞集等によれば帶刀にゐることなれ共内馬場ならは無刀にゐもくるしからしこれらは先生の教稽古場の並合あるへし決り臆したると人にいはるゝをいとふへからす 東照宮小田原陣の御時大橋におさしかゝり馬より御下り馬をは橋をわたし 御自身は人に負はれて川を御わたり被遊天下の大名大に感服せしことあり那須與一か危ところにては下馬して野を歩行たるはなし古くみえたり足利將軍家落馬のことはいましめとして逸平次殿の著述の書にも載られたり四十以上の文官の余事の武也といふことをしるへしわれ吟味役なりては相弟子の外めつらしき人と試合はせさりし也○雷のこと可恐ならには雷氣なし○關宿弓

のこと前に記す夫といひにらの藥所々に而彼是名の高くなるは可恐也鬼神は滿るをにくむ人道は滿るを害すと易にあり謙の義の教可恐々々廿三日おけいの宿下りさて〳〳御世話のかきりいかにや可申段々々次第筆紙につくしかね候段々々御世話より其日ならのはなしといふこと等に至り筆をとゝめたりいかにやしるさむよし野へ行てとまりし時さくらのさかりに月殊によろし今夜詩歌をしたらは不風流ものゝ限なるへしといひしを淺野中書聞てわれさすかは風月を樂こゝろありと稱したり其類のいと〳〳甚敷ものに而談至極の實情にいたり筆に不及也○吹上之公事無滞相濟右に付寺社奉行衆の御覺ことに宜執政の人々御稱しもあり新右衛門は夫に付奉行を賜り物有之候由いと〳〳めてたく候久す美に花やか成公事銘のみえぬは深意あるへし承たし○寺社奉行衆懸りに遊女に七人といふ名ありて不讀衆評のうち作者七人タツモノ七人といふこと論語にありタツモノ七人に限るへからす千人もあるへし以上儒者の考頼朝ふし

鴨緑は水の
藍のことも
青なるより
くなるよ
の名なるへ
詩に王公の
を鴨水と柳
をいれし
へし

きの内に七人かくれたりマブとかいふもの七人あるならし以上軍學者の考畫人の考には七人狸々の圖といふものあり必大酒のみなるへしといつれのかたにや酒のかた十に七ツ間違なかるへし吉原に卍位の名妓に鴨緑アビナンとか呼よしこれは朝鮮と唐の境なる鴨緑江を朝鮮語にてアリナシといふより考たる名也とか聞くされは儒者などの考決あなしともいふへからさるか○歌右衛門のこと可驚武人にかゝるものはあらしと可恥こと也密通申懸のこと右に彌申懸のことたしか也畜生の神のみやしるへ糞をするかこときやつ也はちしらぬのかきり也上かたには内々の悪事はいと多かれとかゝる表向なるはなき也人を殺しても錢密通の出入更になしみな錢にて濟事也關東には俠氣のなほもある故かゝることのある也一得一失なるへし○去月中の矢數三千五百本に及こと一日に百五十平均也調役は日勤にはあらず晝夜勤也別段なること感服の至り也右に付はなしありわれ仙石一件に中書公へ三日ツ、止宿したり其時歌書をもち行て

歌などをよみ休の日は腹直しとて鍵劍術に行たり役人のいそかしきとき一ツ氣をぬく力なくては必ことを誤る也いにしへ寇準か澶淵の軍に出て軍議のことくしの齒を引かことくなるに奕飲熟眠して鼻雷のことくなるといふこと符堅か百万の兵にて攻來りし時謝安か下やしきへ遊に行て圍碁して遊しといふは平家か落人となりて樂器をもてあそび歌の宴を催したるとは大にことなること也○新右衛門と夜話して母上の御前にて酒のむ氣に成て段々書うちに深夜になりたれば例の重吉に挑灯かせと仰らるゝ時となれりかくおもへは筆をとゝめたり

○十三日 くもり 四十五度也當年はしめてのさむさ也○御仕置伺書一覽戸明拾兩以下なるへしと之義に入墨敲之積に口書濟出牢申付置たりしかるに吟味書清書よみ合してみるにいかにも金高也よつて算入をいたし見候哉と申談爲調みれば十二兩余に成たり歸村申付置たるものを即刻召連に遣したりかゝる事江戸にあるへしや可驚事也竹の先に輪を懸候

而所々に參り百姓家に而銅トユを外したるもの也奉行所近邊まで來り銅とゆを外したる奴故にゆるさぬ也大利之もの少々手廻るものは銅とゆ也關東にはめつらしきこと也畢竟やけるといふことなき故とおもふ也同心共なと銅に紛敷とゆを見疑敷おもひしか百姓みな然り土地の風とみゆる也

○十四日 くもり けふは民藏供にて市三郎は唐招提寺薬師寺へ行たりこれはなら七大寺のうちにて千年前のまゝのもの多くある寺也頼朝公の御世話ありて其ころの寶物も多しこの銅佛其外釋迦の木佛いつれも絶妙なるもの也

○十五日 雨 月並の禮受ること例のことし○當年は七月より當月まで十五日前後の月よきことなし全の月の凶年也十三日の夜には月よかりければ例の芝地へ行て夥火をたきてさむさを凌き月見をしたり二間はかりわきに而顔のあつき位の火也みな庭のかれ枝にてある也家來共は松のみ

のからを以て湯呂をたくによしといへり別當小遣の類は屋敷廻りの落しばにてまきを買ことはまれ也といふ也

○十六日 くもり けふは同心共之銃炮見分也○革工伊兵衛明珍風の革胃一ツもち來何卒御召にといふ故に胃は革に而は無覺束といひて斷たるに今朝三枚合之牛皮之五寸四方はかりなるをもち來り今日御前に而銃炮の御ためしに預り度といふ故に三刃五分強くすりに而ためしたるに十玉はかり打たれば合めはなれたり一玉は三枚ながら抜て少々うらをかきたり其余は二枚或は二枚半ほとに而うらかきたるはなし鍛方によるものはなれたる所へ中りしはみな通らさりし也中々牛皮のかく迄に強きものとはおもはさりし也其皮をもどし遣したるに此上は今一工夫あり決而通らす其節願奉るへしといひてもち歸りたりこの頃新右衛門へまいらせたる鏝は牛皮中之精品なる所を八枚か十枚と覺合せしものなればけふの銃炮にて打し革よりは遙にかたかるへし中々刀にてはきれましとおもふ也

其御心得にしるす幸三郎へも御物語あるへしこの革工金錢を不論入念て
するもの也今わかこの地に居るうちならては自由には出來す幸三郎など
望あらは遣へし宵は焚立の飯をいれて温たらは至る柔になるかもしらぬ
也俊藏云二枚或は三枚のうち少々のこりたる所に鍍炮玉のとまり居たる
をみて革工殊之外によるこひて此次持參する革は三枚は勿論二枚はかけ
て通ることなしとていさみて歸りしと也

○十七日 くもり この頃十三日夜のけしきを詩につくりて日記にかへ
申候

今年無月過三秋。却看凝天轉玉珠。今夜不賞又何夜。園中鋪筵月下遊。

白露爲露宵寒勁。頻覺寒威徹重裘。落葉枯枝集來燎。温醪招暖興漸幽。

月花皎々淨似雪。和砧塵鹿聲啾々。賦詩吟詠至半夜。往登邸隅小祠邱。

寧樂万家一望裡。棹山笠岳鼎峙。松濤斷續如洗岸。烟霧半暗疑滄洲。

丹青不及夜色妙。此興在鄉實難求。只恨欠慈母愛弟。潛然思鄉娛忽休。

云何吁是亦天事。好需酒色消百憂。又呼酒兵破愁陣。有功自封醉鄉侯。

十五日十六日とつゝきて寐られすよつて今夜寐酒をのみし上に而燈心二
本の燈下にも亂筆御よみ分可被下候○今夜の酒の肴はうつら也十羽に而
四百文也味至る美也市三郎に給させるに焼とりを手つかみにあくひ茶を
のむ躰全の幸三郎に少も違ひなし丈は予より高し

○十八日 くもり又雨 儒生佐々木絢のもとにて詩會ありわれにも豊年
といふ題の詩つくれといひければ五六首つくり遣したり其内關東のこと
おもひて

奥羽二州關八州。今年大熟粟成邱。可憐祿米寒厨士。暗抱凶荒塵甑憂。

といふ詩ありおさとによみきかせけるに詩といふものはかゝること作り
てもよきものにやうたならば狂歌のことしといひてわらふなるほと俚卑
なる詩也貧乏なる御家人はめしもくはれましことしは藏米とりの凶年也
とは大に狂詩めきたりとて笑ひししかならには御藏米とりといふもの

なければしらぬも又しるへからさる也譬いふにはあらず因に記すいにしへ白樂天は詩をつくりわか家の婆々に聞かせ其かわかるをよしとせられる故に俚の意味多しとかや予は家の婆々に聞かせ其俚なるをいはるゝとは仁田四郎か猪に投られたる類の反躰也

○十九日 くもり又晴 おさと兼而薬師寺の佛足石をうたよむ冥加に一度は拜みたしとの願にてけふは行たりこの佛足石といふものは真淵集の文によれば天竺の阿育王の精舎にありけるを貞觀のころ唐太宗天竺へ御使遣されて寫とり來り唐の普光寺に石にゑりたりけるを日のもとへうつし來りてならの右京の禪院へをさめありけるを天平勝寶元年石に彫りて其ころの人々うたよみて石に彫りて建たる也千年余のものなれ共雨はた石のときものへ彫たれば即今のことくにみゆる也こゝへ行にならよりは江戸の屋敷より堀之内位之もの也兩御隠居様も被爲入度との御事に御同道也薬師寺をかり辨當を遣ひ夕かた歸り來たり右之支度に女共は

十八日の夜すから寐ぬ様子也歸り來りて聞はみちすから 天子の御さゝきを拜み奉り其内 神功皇后の御陵へ上り拜み奉りしに數千年のものなれは雨にて土なかれ御石槨のときものはつかにあらはれみえ何か御手道具のときものなと納しものかかめのこときもの三ツはかりこれも少々あらはれたり 八幡宮の御母上に三韓迄御征伐ありし御ことおもひ奉りて殊更にかしこくおもひしと也唐招提寺へ行てならの京のころの堂塔の猶のこり居るをみこゝの本堂はならの京朝議堂とかいふものを 天子より賜て建たるといふこと好古小録といふものに出しと覺たりしか書目をさへに忘れにけり「夫々薬師寺は行紫銅佛瑪瑙石の式石などをみて驚てはなしたりこゝの佛はみな唐朝の人來りてつくれりといふ釋迦にても何にても南都第一絶妙の細工也須彌壇からかねにて高三四尺長二十間前後之ものゆから風のもの鑄附あるなど實に珍物也瑪瑙を以石たゝみを作れるにて其余をおもふへし唐より渡りし佛しやり頼朝の納られしと云金

の高サ二尺前後の堂に納めありこれは今以藥師寺と唐招提寺立合て日々正九ツに經文をよむこと也其時は拜ますること也眞の佛骨はいかゝあるへししらねとも千年有余眞の佛しやりとて尊ふもの也おさとけふみちを半分程はみな歩行せしといふか更につかれたる躰もなかりし也

○廿日 くもり けふは市三郎は寶藏院の誘引にて立田川のみちを一覽として行たり寶藏院は市三郎の槍術の師なればゆるして遣したり立田川はもみちの頃巡見所なれ共われはいまた行かす市三郎歌にてもよむか覺束なき事也誠一郎は一昨日行て何かわからぬ紀行躰のもの書たるといふこと也いまた見ず

○廿一日 快晴 今朝霜甚し薄氷ありといふ北向の長屋のみ也○けふはもみちかり辨當かりをかねて庭へ筵をしきて築山のうらの芝原にておさと女共勿論兩御隱居様御出にて一同めしを給たりはつかに豆腐に庭の柚にさとうをかけたる位の事也客來なく盜賊なき所なればかゝることの出

來る也庭もみち殊によし朱のことし

○廿一日 ^{二カ}くもり雨 大に暖氣也寶藏院に後見あり滿田權平といふ當時の寶藏院胤懷の叔父也この人槍術のことは引受也この人の話にならの大安寺へ曉に挑灯なしにて行たるにそこにはよるく光りものみゆるといふ故に少々氣味おしかりしにはるか成かたに手まりのときひかり物みえたり大成聲を發したらはよかるへしとて大聲に詠謠をうたひたるに其光り物忽に目の前へ來りたり大に驚たるに向より挑灯の來りければ又忽に遠くは行てみえずなりにきいやなることゝ市三郎へかたりたりと也與力らかはなしを聞に名はしらす六七日已前のことか大安寺のかたへ行しものこゝの光り物は大聲を發すれば直に出るといふはまことかと一人のいひ出ければ酒に酔たるものありて戯に大聲をあけたるに忽に車輪のことなる猛火忽に飛來りて首の上にもえければ一同ワツといひて地に臥たり無間もいつかたへか行けるかしれすあまりに臆したるとて秘し置

しを又酔の紛にこの頃の大安寺の光り物はいかにといひければ夫よりしれしと也市三郎へ同心らのかたるを聞に魚鳥殺生に行て深夜などに常に逢こと也何の害もせずといふと也大安寺はならをばなれ半みちはかりのいなか也

○廿二日^{三カ} くもり 月並の講釋あり右に大安寺の光り物のことに付今にわからぬこと有六十日はかり前に庭の泉水のふちにてよる四過のことなりしか地上二尺四方計白くひかる也おさとみつめてわれにいふなるほとわからすおさと直に庭へおりてそのひかるものゝ所へ行たるに壹貳間になりて光なしわか椽にてみ居たるにかけもかたちもなし毎夜のことかとおさとゝ内々心をつけ居たるに少も其後ひかりなし朧月夜なりけるか雲間より月光のもれたるものか何分不分明のこと也この地へ來たる夏庭の築山の向ふにて時々あやしき聲のものなく也すゝみかてらに行みたるに何か小犬ほとにみえたるもの走り行たり其ことおさとへかたりたるにお

さとか日くれ間もなく月みるとてひとりかしこへ行たるに其あやしき聲いたすもの木の間より出ておさとの首を飛こして逃たり何かはしらすいつれ獸なるへしと追ふかたりける後にみれば御役所にはてんのすめるある也其なつの末に同心共うちよりて打殺して初みたりし也其後はいつ方へ行けむ其聲なししかし夜ことに枕近く狐のなくはしはゝありこれは却る來りしころはなし去年來のこと也これもなれて今はめつらしからぬ也ぬえのなくをはこゝに來りてはしめてきける也万葉にぬえとりといふまくら辭しはゝあり笛のひゝきに似たる聲と眞淵はいひき眞にしかり既に笛とりとさへにあやまりてなら人はいふ也

○廿四日 はれ このほとかせ流行する幸に疾むものなし○つゝきの留守宅へ使を遣したるに瀬々のあしろ木にてとりたるならしひ魚をくれたり歌にはあしろ木によくよむものなれとみるははしめて也人々しらすほしの新しきなといふ江戸の魚ならば白魚と同じいとゝめてたきもの也

いわしの子とはしらす干むこひことをなといひて笑ひし

○廿五日 晴 昨夜十二日附之宅狀來る御一同之御快然母上の御機嫌克御事恐悦之至りに候○御けいかたより書狀來る新右衛門の取計難有ことをことく述たる事申中々筆にあまりたることにて先便に新右衛門の申來りし利害之趣徹底感服せしとみえし也○右之内におちさまの何にてもねたれと仰られたる故紫のやま繭をねたりたりといふことありおさと一同あまりのもたれたるあまえやうとて驚なからさても新右衛門も目出度故に申さるゝなといひたり乍去いかなることゝやあまりのことゝ夫婦申合候さてく氣之毒之至に有之候御禮のしるしかたも無之候○都筑之御用 召に而相談相手なくなりてうらさひしきこと也きまもりの柿ののこりしかことくにおもふ也母上の御狀拜見のたひに賜さるゝかことく也あまりの御實情に而其御書拜見の時はよすからおさと一同いね不申候難有過てかなしとはこのことなるへし○關宿にて馬を御覽足とり別段と之事我曾而

きく十疋の馬に客馬一疋位なるへし足とりといへは先ツは前をよくとること也或は大馬なとか或は緋をひくといふ類也緋を引はもとより用馬なれ共大馬のことは陣中に忌こと也大刀と同じわけ也さて又馬の前をとるといふは畢竟物につまつかぬ爲なれとも今の前とりといふは甚敷は全に馬のおとりをおとるかこときものにて只見躰はかりに而一向に用なし馬の用は躍よしとき躍はだくとよむ也だくにのり夫をつまり拍子といふものになり夫迄のこと也實用はだくにとまるといふ也常にのれはおとりも拍子もだくになりかの先生召せはだくなしなれ共父めせは常にだくになるとあき常かわらひしと同じこと也しかれとも遠足などにだくに乗らむとすれば決而のれぬ也遠藤但馬守殿 上覽のとき兼而軍馬をのみ被乗故にだく足になるよし御斷ありしに却而拍子になりて恐入を被仰上たるとか其ころ人の口さからしに申せし也まことにや新右衛門馬をのらるゝならは逸平次殿の書をかり寫し置可被申候實用のこと多し此節ならては借出せ

ぬ也人の爲にもなること也御忘れあるへからす○竹内の參るよし日記に
みゆよき相談相手也信を以御突合あるへし竹内は組頭中々偉人也○大越
のこと段々忝候小生よりも佐々木可申遣候只々行道院様の思召をお
もひ出てあはれにおもふ也○頭巾のこと早速御申越可被下候申付候様可
致候頃日の鍔炮の躰にては弱き弓にゐは中々通るましとおもひ申候右に
付はなしあり頃日楠の籠たる千はやの城あとより出しといふ矢の根を多
くみたりみなくさりたり其内實用のもの貳本所望し置たりこの次のたよ
りに進上いたし可申候先生に御たつね實用のものか又はかたもの徹しと
いふものに作り革冑の御ためしあるへし先年久保田所持之冑へ矢の通り
しをもち來り彰常に誇りたりしに同人八分はかりの弓にて射しに容易に
通りたりし夫を以おもへは出來合の冑より革のかたたしか成へし頃日進
上の鏢などは牛の皮精煉を極めてつくりたるものなれば決る鍔炮にても
通るましとおもふ也夫は三枚合のためし前に記せしにておもひ合する也

右にゐも先達ゐのねりくらのことく大丈夫なることを御承知あるへし

○廿五日六カくもり御用日公事十一口あり○けふ飛脚やより注進あり和

泉守殿御本丸勤松平伊賀守殿同斷久世出雲守殿西丸御老中内藤紀伊守殿
大坂御城代土屋采女正松平紀伊守寺社奉行右之通被仰付たるとの事并若
年寄出來之旨をも申來る扱も御人撰の次第永續方之思召別段なる御事と
恐悅に奉存也出雲守殿なと別段之事に其上西丸とは微妙之御事と行末
をおもひはかりに奉感服也新右衛門なと別段に思召下さるゝ御人御老
中に別々多く出來たり深く御つゝしみ候ゐ人の世話などあるへからす御
用心別々也われなど右に別々人に妬忌を受けて今後悔する也其勤向にか
ゝることは別段也このわけ近思録中司馬温公の伊川先生に人材を問はれ
し時の答に詳也御爲忠義とおもひても職を越ゆること過きと成也君子は
おもふ其位を過さすといふこと諸事に通する也右に付ゐもおもふ新右衛
門段々よく成上は此末決る左衛門尉のこと彼是と思召母上決る御無用也

此節左衛門尉など勢を得て歸るときことあらは却る大成災あるへし十年はと急度おもひ定むるころ也伊勢守殿は別段は家格を段々御辭退ありしはよき御教也

○廿七日 晴 至る暖氣也あしろ等のひ魚を一人にして給へむも興なきこと、思ひて與力共一同へ酒を振舞たり其席に與力のおう大か原へ行しものにきくにあの邊にては水源を川尻といふと也古事記などに川尻といふことを水末の事とおもふ故に解かぬるに川尻を水源とすればよくわかるといひき扱又怪獸のことを聞に雪中に足あと馬のときもの折々あり一足のもの、ことしといふ也甲州にある變といふ獸の圖をみしことあり其類にはあらずやおもふ也いかにしへ人の住けるにやとおもふ所あるといふ可疑こと也

○廿八日 くもり このほとのもみちの色全に緋ちりめんのことし關東には絶るみぬこと也春日山の松間のもみちなどはもゆるかごとくに所々

にみゆる也風土によりて別段に紅葉するとみえたりトフタンは庭にあれ共黄はむのみ也この邊の寺院の庭のみかくしのかり込にもみちとかしとをませてするいとみことなるものなり長崎奉行稻葉病死せしとの事也交替中に付井戸は居越になりしと云也立派なる葬送をしたるに似たること氣の毒也借金は必四五千兩以上拜借も千三百兩は必あるへし幸に似たる大不幸也

○廿九日 晴 夜五ツ頃なるへし庭にてけしからぬ音す也馬見所のまを破る音甚し女共手燭もち出てみれば鹿の庭へ入し也女共もなれて更に不恐市三郎とわれと竿をもて所々逐けれとも庭廣ければいつくへ歎逐失ひし也鹿は來りても少しも打ことならず遠くより聲をかくる而已也よつて彼か勢ひ甚しき事也され共一夜のうちにも菜にてもはたものはみなつくさるゝ也人の話にある奉行の頃には鹿を三四疋まで奉行所にて打殺したれ共病鹿との事にて濟たるとの事也このこと真ともいふ

へからされ共市中にあらは鹿人のそばに來り食を乞こと全に犬に同し奉行所の庭にては二三間より近くは人をよせす左もあるへしとおもふ也今夜も庭の隅の男花のしけりたるうちに牛のことき鹿居れとも打こととはならず扱御奉行さまの角にて突かれたりといはれてもならずよぎなく遠方より聲をかけて逐ふはかり也女共は却あなれて少も不恐れむそのなとみないて、逐ふ也江戸にて鹿に逢は、いかならむ

○卅日 晴 眞田信州より古鏡あらは求度との事に付其筋ものねたのみ置たりけふもち來る八寸はかりの丸き奇絶なるもの也紫なるかことく碧成かことくさひいろいふへからす背にいろくもの彫あり唐の世のもの也とみるものはいふ也いつれ古きみさきより出たるものなるへし價は三兩貳分也脇坂などはかゝる類のものは好まれ不申候哉ならにはいまた随分あり行基やきの壺も來る十匁位也いくらもある也

○十一月朔日 くもり 逸とは勞のうらなれは遊ひたのしみて今いふのらものゝことなるへしよつて周公の成王へいましめ給ひて書經にある通り仰られたる也其大意よく出精し給ひし人は不敢荒寧或は日のかたふくまで食事をする暇もなかりき或はかりなをして樂みしたることみなかりき或は外にて久々苦勞をし給ひきかゝる人々はみな長壽にて文王のとき九十七までも御在世にて御位にも五十年之間あらせられたり其外世々の帝王無逸の人々みな長壽也といふ例をあけて其末に樂にふけりしといふ人々をあけてそれはみな長壽短して或は五六年或は四三年にて崩御ましましたり前にいふ遊ひたのしむ程の壽命の毒はなしと御説トキなされたる也周公の聖人にて聖智を以主人として兄たる武王よりみなし子の成王を御預りありいのちなかゝれとて御苦勞なされたる長壽の聖人直傳授といふものかくのことしされはよの人のたのしみといふことは十に九ツみな短命になることをすること也このことを以朝夕不怠出精するの壽命の

くすりなることをしるへし今の世に藝にくるしみて死するもの壹人もなしあれは目出度のかきり也周公の成王へいつはりを仰上らるへきことなきといふにてこゝろを定むへき也牢内ものか欲のためと決斷のあしきにてこゝろをく^{る脱カ}るしめこゝろ結ほをりかたまりて氣血不廻身のうちに不順の所出來てそこへ時候を引受て死するに似たることはある也可恐事也別々遠國にては起て居るうちは夫より夫へと藝へこゝろをうつせは其うちは故郷をも不思こゝろみちのうちにある也閑居すれば不善の念起る也かの牢内ものゝ欲より起る氣苦勞の輕きものとなりて大毒也君子無^レ故琴瑟身をさらすといふも放心せぬため也母上わか藝にかゝりて毒とならむかと思召故に害にならぬ證據を周公の申せしことにてしるし入御聽候御安心可被下候書經は先ッ母上の御信心の法華經周公は釋迦と思召てまかひはあるましと奉存候

○二日 晴 われ九歳之節はしめて 行道院様四書を御教ありていみし

く御世話有けれ共覺もよからず例の頑にして鈍き生れ故に十一歳までに漸に四書をよみ畢りたれ共半は忘れ居たりよつて十二歳ニ正月より友野霞舟先生のかたへ行て又大學よりよみ直したり夫々十五歳までは書物をもよみけれとも十六歳の時よりは所々へ奔走して諸役人の登 城前といふ事に行ことをな^りたりこのこと父上はいそかぬことゝて御進みなされさりけれ共母上の早く勤めさせたしとて神佛へ願かけなどをなし給ひて寒中椽頬に而經文など御よみありき其頃よりは日々に書物をはよむなれ共つとめてよむことはなかりき十八歳の三月に支配勘定の出役といふものになり廿一歳の六月に評定所の留役助になりしよりは諸藝共に癡^て絶してはつかに時^くいとま通鑑などをよむことなりき廿五六歳の時より留役のことつとめなれていそかしきうちにいとまありて書物をまた取出し夫よりはかの仙石騷動ニ一件に而脇坂へ三日ツ、止宿して吟味物するうちも書物は携行て少しはみるといふ程なりき霞舟先生は正敷朱子學

也よつて朱文公新注の外はみさりき三十二三歳のころなるへし林大學頭の實家松平能登守領分に大獄起りて大學頭の其こと取計けれ共六ヶ敷とて仕置當りをしらへてわれを招き問るゝことのありてわれ其次第を一夕にことくく差別を附てみせられたは大に欽れて其のちは役人の知行のこゝと能登守領分のことなとみなわれに問はれ既に津輕の儒生黒瀧藤太といふもの刑名のことの修行に出しときもわれに相談せよとて彼ものをわか方へ向られたる位のこと也其頃より佐藤捨藏にも屢逢てはなしをきゝたるにこの人は九分は陽明學也大學頭は陰に陽明を交られたる人にて捨藏一同にもとは徂徠學也され共われ兩人の學文のおもしろく殊に大學頭の豪傑なることにいたく感していろくのことをとひたり吟味役と成りては加賀守殿の内命にて行て相談することなともありし也其頃捨藏の塾生をもとせし細川越中守家來澤村宮門といふもの來り活用の學のことをいひて明儒學案をかしくれたり其時はしめて陽明のことをしり傳習録な

とをよみたり人われは陽明學をするといふものゝあるは夫故也しかれ共わかこゝろにては陽明か朱子晚年定論といふものもありて朱子學も同じことかとおもひ居たり其後捨藏の弟子眞田信濃守の儒生佐久間修理をたのみ大學或問易などをよみ貫ひたるにこの人捨藏とは違ひ専朱子學にて陽明説をはいたくにくみてわれに學部通辨求是編などの類をかしくれて來ることに辯論することなりしかさして修理かいふことくとはおもはさりきしかるに三年來大に閑暇を得て朱子の全集をはしめとしてよみて夜分までもいろく書をよみみるに朱子と陽明とは本領大にことなるを陽明の了簡のことき所をきりとりて朱子も晩年にはわかことく也云れしもの也朱子と陸象山同時の人にて學派のことなるはたれも知るところ也しかるを陽明は象山を以孔孟の正傳を得たりとまていはれて其子孫の世話までありし也其上に陽明學の眞面目は知良知也この良知といふこと陽明先生より先に宋の呂正獻公説はしめられたるを朱子のいたく破られ

たることみえたり其外一貫の説なと朱子の説は陽明とは表裡の違ひあるかことくにて何分にも同じことゝはおもはぬ也よつてわか子孫たるものもし書物をよむものあらは朱子學の専らなる人につきて朱子學のもの薛文正丘濬などの類の書都而程門専途の書をよくよみて外の書を決してみるへからず日蓮宗のことくなるへしされ共武士といふものは儒者のする所とは違ひ既に博く學ひて方なしといふ聖人の教なれば前にいふ程門の書を專によみて其後は陽明の書も徂徠の書をもみるへきこと勿論也腹に少々了簡のつかぬうちにいろゝの説をきませこせになると大損也又かたよりて更に異學の書を読みぬことに極るも損也了簡か附たらは何の書をやむとも勝手たるへし以前もいふ通り万世天下を治むる書といふは朱子學也夫故に日本にゐると朱子學はせさりしを 東照宮にいたりて專に御採用ありて當時のことくにはなりし也与風おもひ出るまゝを記す也○きのふもみちの散たる庭のけしきあまりによき故に行みし歸りになてし

このはな霜のうち多咲けりけるをみて

なてしこのはなにもおもふなてし子よなともみちはと早くちりたるには彰常のことおもひて也

○三日 晴 きのふ松魚一尾を買たりこゝのものはかつほをしらすまくろの子をかつほ也とて肴やまてかいふ也しかるに眞松魚にて江戸にいふ秋の大松魚也即買て家來共にさしみにしてたへさせたりみな舌をならせり伊奈遠江松魚一尾三分にて買二きれつゝ煮て所司代の公用人に遣したるにて其余をしるへし父上へ入御覽たるにこれはくゝとの御意全くにみよしへ行たるはせをはかくやとおもふはかり也御よろこひ無限ためつすかしつして御覽あり母上を御呼被成てとりくゝの御賞也はしめはもしやふるくてみな酔はれてはいかにと家來にとひしに死てもくはむといはぬはかり也これや松魚の徳なるへし出まかせに

從別松魚既四年典衣必買豈論錢香醇今日爲殊絶醉向殘楓問杜鵑

かくいへは高きかつほのことくなれ共八奴也これも肴やの眞偽をしらすして京都に及さるの幸かもしらすかつほのほり出しものとは大笑也

○四日 晴 御用日公事十二口あり一旦晝飯に引て七ツ時までかゝるこの頃白洲にて吟味之仕方をおもふに双方之理非を分るにくるしむ故に言葉もあらくいやにも成却あわからぬ也白洲は出るはわか眞學問なればわかこゝろの道理にはつれぬ様に深切にすへしといふことを主にして聞く也さすれば白洲も書物をよむも不違おもしろきかことし言葉穩に親類相談のことくになる故によく服するかことしこのこと去月以來の心附也○寶藏院來り面謁を乞ふ故に市三郎の師わか流祖のこときもの故に逢遣したるに傳書を久喜右衛門に與ふるにわか染筆を乞との事也内々喜久右衛門の頼とみえたりしるし遣す積に預り置開きみるに誤字落字等多く圮上を犯上と書ける類其外いかにしてもよめぬ所あり夫を校合したるに夜四過までかゝりたるはけしからぬ損のことくなれ共わか流祖の傳書の

誤正さゝるを得ざる也都武藝傳書に誤字等なきは少きもの也

○五日 くもり 昨夜五時過宅狀來る母上様倍御機嫌克其外之御無事日出度候左太夫殿の御事に付被仰下候趣御尤に御座候御同人方は一昨日も書狀出し申候彼方より參り候書狀も有之候其内次部一事は母上ならては參り不申候義と奉存候別番之書狀差上候積に付其節右に御承知可被下候扱又金子のこと何分心障にあり居昨日も其事申出し候義にありき砌に付この方々三十兩進上之積御取計可被下候直に五十兩にいたし相廻し可申歟と申候處民藏申には左候は却先にも氣之毒に思召へく候間先三十兩と申候間其積にいたし候得共彼方之都合次第可相成は五十金遣し度ものに御座候新右衛門とも御相談之上御取計可被下候又々爲替取組可申候間其内先達之金子之内にあり共先被遣可被下候○西國之義新右衛門聞邊ほとには有之間敷候其譯はならなとも同じこと先支配へ葉向のため大造之義を申成し當時之支配をあしくいふ也あしく聞人は己か

功にほこりて其上へ大造にあしく申故こまることまゝある也いつ方も遠國みなこの風也日記に内三奉行衆吹上に御庭拜見に上に御沙汰共難有御事也瀧野侯に御書感心の御事御取廻し等宜候由中務殿に遺風あるとみえたり右に侯へ不苦候は唐墨製に墨進上いたし度候否御申越可被下候右に御方は先代に御世話をおもひ出候に常に外ならずかけなからおもひ奉る也新右衛門などの事よく御世話ありし也唐墨製方の義いろくの工夫に全に此ほど出来上りたり阿膠等にわけにあらず丸に和製等とは別段なるものなり此ほどはあまりによく出来て夫を唐物やなとへうることありては如何に付陳玄堂の銘をきれと申付たり摺ても書てもわからぬ也ヒツなどもよくいる也され共唐墨は製候いつれ四五年以上を歴たるもの和製は三四十日日にははやうり出す故に枯かたよからぬ也こゝにてねはりつく氣味ありされ共こき墨に書てもちまぬ也當冬工夫に墨近日に廻し可申候直胤か相州傳のことくに容易の人に見わけするもの

はあるましとおもふ也○良平こと大病のよしこの人われに三ツはかり上なるへし五十二はかり也可惜これにても養生をせねはならぬ也死は度外に置いて養生はしはしも忘るへからざる也日記に内弓馬のこといつれもし幸三郎など甚案事といふは平日遊ひて前に記す周公直傳の長壽の法に背也何卒前とこゝの所御みせ可被下候心を墮弱にするもの十人に七人まで短命也可恐新右衛門の弓馬歡にあまりあり十八日御役替に事前に記す○村田翁のこと別段也この人古人に不愧こと多き人にいかに書をもみす暗に符合するは不思議といふことを隨筆のうちへ記し置忘れたるるとき隨筆の内一條を證據にみせしにかせといふ故に一夜かしたりしにみなよみところ抄書して右に文盲なるといふことを見出し追ふのはなしにわれを古人に不恥といふはよけれ共書をしらすとかきしは實事なからかすともよしといはれて其事に心附大に赤面したり更に人の不及はなれたることある人也しかし子に死なれたる可憐に至也子は更に親に

は不似人なりき嫡孫は血筋の人を孫よめに配せしにて手跡なとよくしこ
れは廿二三と覺たりしかもしや不縁にてもなりしか新右衛門日記と不合
いかに○敬と禮とのこと御尤千萬也よつていふ一天下の書をみても敬禮
に出ることはあらし書經虞書はかり欽ツシムといふことをいふこと十三ヶ所敬
をいふこと七ヶ所あり顔淵問仁の天下歸仁といふも工夫は非禮みること
なかれなり大雅文王の詩は周公の御作也といふ詩也其内に成王をいまし
められしに紂王のことく天に見かきらるゝなといふことを 仰られて天
命は常なきものなり殊に音もなく香もなきものなれはいかにして天命を
保ち身を全せむといふに外にはあらず文王のなされかたを手本にすへし
とあり文王の被成かたといふは文王ノ緝熙にして敬すること也されは天
道に叶ふ仕かたを手近く教たるものは敬とするへし敬とは多端にわたる
ことなれ共つまりおそれつゝしむのこと也これ朱子か敬は畏の字近しと
いはれたる所也こゝにかなしきことあり我等のとき小人にても敬畏の

ことあれ共常に斷絶して時々おもひ出す也故に小人也其斷絶なき様にす
へしとの意を示されてもつはらにして不止とあり夫によつておもへは事
々物々に敬畏をおもふこと糸を引はりたることく少も斷絶なきことゝみ
えたり其絶間は天にみかきられて居るうち也其天道にみかきらねてている
うちに大小もあり數カスもありて生涯見かきらるゝにいたる也そこか天命の
常なきことなれはおもひ附てきか附ときは直に見かきらぬ方はくり込也
故に天命常なしとは周公の 仰られたるなる也なれ共小事にて大變の出
來るは火の等閑なると同事にて小火にても大火に成也周公の天命のしか
りてもはからぬことをいひきはめて夫をよく守るには祖父の文王を手本
にせよとはさても手近き教かた也聖人の高きことを近く手近く即坐に氣
のつく様に仰らるゝことは絶妙也これこの詩の先儒聖作なりといふの偽
ならぬことをしらるゝ也○つゞきのことに付うたよみしか其ころ記せし
か忘れたれば記す也

故さとへ歸るにしきに着ませとかやしほに深く染るもみちは
いかにしてまたきにはるを知ぬらむ友をのこして歸るかりかね
よき友はよに出る跡に濫かきのこのみひとりはこのさひしさ

其ころよみて反古のはしへ記置たるまゝにて遣はさりし也この人近頃う
たよむといふ故に參られ候は、此うた御はなし可被下候○安富のこと御
目見被仰付候由は難有御事也○前の敬禮のこと新右衛門の心附至極のこ
となれば其外に求むるに不及立派なる學問也とおもひて聖教を引て新右
衛門のこゝろの證據物を出したる也陸象山は聖人の書といふものはわか
こゝろの注をかきたるもの也といひたるはおもしろ過たること也とて人
のそしるなれ共朱文公の語類にも六經をよむ時は只いま六經あらざる
かこゝろにもとむるといふは朱子學にてもよきとみえたる也○治部のこ
ととても母上の仰られたるとて聞へきにはあらねとも何分にも高橋より

被遣たる少女も不便さて母上の肉縁の御甥に付こゝろをつくしたきもの
也左太夫殿之書狀を御見せ候る治部か妻へよく母上より御利害有之候は
、如何可有之哉新右衛門一同御勘辨之上御取計可被成候勿論書狀は被遣
候には不及候万々一如何之義有之甲州などへ參り候るは左助殿之少女き
のとくなるものに御座候しかし左助殿間もなく御歸りも可有之哉且此節
之治部之次第にも寄可申哉に、遠方之勘辨には參り不申候間申候迄も無
之候得共前後之様子御見計御取計勿論之義と奉存候左助殿方は例之はつ
と末文の御書被成候を重く取過候る事を起し是も又少女之難義に相成候
義に付容易之義出來不申此節之牀はかり兼候間決兼候りいろくしるし
候

○六日 くもり 暖氣也田舎之風聞大笑也土佐守卒去同し頃松平甲斐守
并膳所本多など死去之由いつれも脚氣昇進と之風聞夫よりおもひ附候る
國持申合候義有之候る土佐之屋敷に重き御人を御招申上候る茶之湯の會

有之其相伴の面々に而郡山其外は果しと之義をいふ也馬鹿の風聞も程かあるとて絶倒したりまくろと松魚の見分ケなきより甚しき也先達而土佐大病に而上使に酒井某を被遣たる急飛脚之國へ行たるを大坂に而めつらしく及傷沙汰之風聞いたすなどののこりとみえたり可笑のかきり也かゝる故にわれこの詩作歌などの書贊をたのみかけものなとにする也

○七日 晴 昨夜庭へめじか來りて騒き夫に驚てきつね騒立六時分に市三郎など棒をもち出て追拂てこと濟たり今朝みれば御隠居所の脇のはたけは大根もねきも人參も數疋の鹿にみなくはれたり犬と違ひ鹿の害は畑もの半年のくるしみを一夜に微塵にすること也

○八日 くもり 庭へ小牛のとき鹿高塚を飛越來りて畑をあらすなれたる女なれ共恐れて逐かねたりよつて市三郎誠一郎など其外大勢小遣共よりて逐ふにつきて漸に逃たり高塚を容易に飛越たりこの鹿この頃屋敷のすみの草むらのうちに晝夜居て畑ものをあらす故一同こまる也けふは

五十九度より六十三度迄にいたるかくれたる金魚又水上に浮ふ也

○九日 くもり 都筑吟味役に成たるよし飛脚屋の注進あり同人江戸へ出てますく季陵俊荒のおもひあり○今夜五時過東北より西南の半天へわたり數十丈の白氣あらはるゝ白虹のことし水氣にや雲にや不分明なれ共帶のことく東北のすみなもととはしられす半天迄みえたれはくもにはあらしとおもふなり人々みなはしり出てみる表より其注進ありて走りて居間へ知らする足おと何かとおもひし也常ならぬ時早走りする足おと不時に用人の出るにいかにやとしはし胸とゝろく誰もみな遠國に而はしかり

○十日 くもり けふつゝき吟味役被 仰付たるしらせ來る竹垣三右衛門場所替に而關東へ參るよしのしらせ來るいつれも江戸へ出るうらやましき事也われ江戸をこふる念慮を斷絶すへくとおもへともならずこれは母上のあらせらるゝ故に一日も早く歸りたくおもふか道也こゝろにくるしみおもふはみちより外道へ入る也いにしへ陽明先生久々父と祖父とに

はなれさすらひ人と成たるときにこの説ありて祖父等をおもふはみち也といはれたる也又ある人朱子に子のよかれと親のおもふは誠のみち也やといはれたるに誠のみちなれ共必よかれとひたすらにおもひつめるは天理よりして人欲に陥る也といはれたりき右に二ツを以おしはかれは日々に歸りたくおもふは可也母上のことにてもおもひにおもひてこるにいたりてはみちにあらざるへし

○十一日 是れ 少々さむしこの頃は太坂米價あかる故にならもあかる也一石八十八匁迄になりたり去年の今よりも高直也○けふはしめて火を附たるもの、吟味をする也附火を捕ても御褒美などは更になきこと也江戸の御褒美は日本橋の高札ある故なるへしかゝることに江戸のヲクビ出て仕損を恐るゝ也○人のからたはもろくゝになるもの也我いまころはあかぎれの出来てこまるなれ共昨年来其氣味更になし手は油出て油手といふ程にはあらねとじとくゝとする也よきか悪しきかしらぬ也癩症にても

出るとおさといふ也しかし別に癩氣もなき也

○十二日 晴 此ほどおさと快て四五年ふりに書見又は紀行なとかく也夫に附昨夜予にとふ 垂仁天皇の御陵を蓬萊山と云はいか成事にかといふ故に夫はからにて 天子御在世の時に御陵をつくるに目出度名をつくること也夫は下さまのものゝはかを壽藏といふにてもしるへしと答置たりしかるにけふ書物をしらへもち來りていふは日本へ書物わたりたるは崇神の 御世より遙のちの事也さるにかの名あるは其御世に田道守といふものに蓬萊山へこよにてはとよむ也橘をとり遣されたるに 垂仁のかくれさせ給ひしのちに歸來りていたくなけきて御陵になき臥してそのまゝ死せしといふことみえ其のち靈龜の頃にいたりて田道の守の陵の守戸三戸を置たるといへは疑ふらくはそれより蓬萊山の名を 垂仁のみさゝきへをゝし奉りしにはあらずや既この頃薬師寺へ行みちにてかの陵おかみ奉りしに陵にそひて小山あり夫は何といひしにあれば御車かたといふみさゝ

き也といひしか其小山こそ田守か陵ならめとおさといひき以上のことはわか出まかせに詩を考なから年歴をも不考答たることにて分明にあやまりをしることなれ共是に似たるわからぬことにてからの引附にて日本を解し大なるあやまり多かるへしこれ日本の書物を不讀してはならぬわけこの類のことたとへは鍛冶やといふは鍛冶タヤの誤なるへしと源順か和名抄によりておもへともかちはかねうちの略かちと成たるをしらぬ類也

○十三日 晴さむし 昨夜より風邪の氣味なれ共月並に講釋には出席したりよるはこたつにて四ツきりに讀書をやめたり

○十四日 雨 又あたゝか也けふは風邪快かみ月代いたす當年は母上の御症のとき風邪更になしいつくかしまりし所あるとみえたり

○十五日 雨 暖氣也夕かた晴るゝ○俊藏の小女かしの實を拾ひて多分にもち居也夫をまきてみよかしの木の生するといひしに何もみな實をまけは生る也人のたねはいかにおつかさむはさら也われらはいかにして生

しやいかなるたねをまきしや教くれよといふ兩親こまりたると也○新右衛門より宇三郎を以善之介のあとの事世話いたし吳候あみなく難有かり候而其旨俊藏方へも申越たりとて同人よりわれへ禮を申出たり都筑妻一昨日出立之由病氣同篇之由さそ心配なるへし

○十六日 晴 鍋嶋大番頭牧野町奉行池田御勘定奉行被仰付たるよしの風聞書飛脚やより出す田村或は大屋などあるに越てなるは別段御人撰人物故とみえたり○六時六日限急用といふ狀大越より來る胸とゝろくおさとへ少女の縁談の事也安心するこれらは遠國ならては心もちわからす江戸にて遠國をおもふと同一ことなるへし○けふ筆きれたれば家來へ遣したりこの筆淺野中書甲府へ出立前一本くれたりしを今迄遣ひたる也はや七八年に及ふへし指のあたる所筆くほみたりけしからぬもの也○右之筆を書をよむ家來に與ていふはこの筆を遣ふに一度遣へは直に少しも墨の氣なき様にいたし置故にかく長壽也人間も又しか也遣ひて世間のことに

あつかるは筆の墨と、もに用をなすに同じ墨と交はらされは万年存するとも筆の用なし人も世間のことを近くは父子君臣より遠くは天下のことに預らねは人間の用なければ人間に似たるものといふへししかし其時限其時限にわすれて洗ひたる筆のことくならは長壽なるへし少も墨の氣のこりたらしいのち短し人間のことも筆のことも同じこと也この理新右衛門御考あるへし扱又先達を敬禮をつくすとて飯嶋のこと御申越御尤也心附てせねは心附かぬに同じと諸先生の説也このことを朝夕御逢なさる、豊藤第一さては筆下の寺社奉行の至ることなれぬ寺の役へはしめに敬禮をつくし夫を手近く出會する人より段々とおし及ほし候様御心懸しかるへしこのほと奉行のかはりめに付至る大切也けふもいろくのはなしに此ほと我死しても新右衛門幸三郎あれは何とか取計附也新右衛門に何そのことありてはわれはしめ仕かたなし新右衛門を案事おもふこと朝夕しはしも不止よつて記す也

○十七日 くもり 暖也この躰に寒中まであらは來二月は米五十兩なるへしされ共實は此節の暖氣は當五月を土用前の冷氣の殘なるへし其上來年の潤の故もあるへし多くは寒中にいたり時節直るへし左候は、米三十兩前後となるへし夏の冷氣は冬過暖の應也冬の暖氣は夏冷氣の根也人にくむ極暑と極寒とによりて豊年と成る也暖氣の冬冷氣の夏病人多しはがくしきあつさなといひて人にくむときは寒氣も又けしからすとて人にわるくいはるゝ也其時はいつかたも穩にて實は差引をよくしてみると病人は先ッ却る少き也このこと萬事に通する也當年の夏のこときは例外也平均を以ていふと前のことくなる也

○十八日 くもり 御用日近々いなり祭に付出入之ものよりいなりへ相撲の奉納あると云こと也ならにもいなかすまふ六十人はかりありさしきなど立派にかけたれは捨もおかれすまつりの入用いつも五六兩ツ、かゝる也けしからぬ事也

○十九日 晴 至而暖氣也され共昨夜よりけさはさむし泉水北のかたはしめて氷たり四十度の寒は今朝を以はしめとす○昨日御切米渡りたり四十八兩程之相場也これはならの上米直段八十八匁八分夫を米に而とらす代に而受取れは一石に付貳匁ましにて御預所にてわたすよつて一石九拾匁八分相場也銀相場安しよつて四拾八兩位につくなるへし

○廿日 くもり けふ吟味物之入墨後盗いたし候もの有之單物一ツなれ共不叶よりてもらひ物之積に吟味詰たり人足寄場あらはかゝることはあるまし御仕置後十日目也遠國之來り寄場の難有ことしらるゝ也○あした祭なりとて夜中煮ものなとするまつたけの煮たる計大半きり一ツあり赤飯貳石もふかす也けしからぬ仕來也いなりの奉納ものをするもの共は百疋或は二百疋遣す是も仕來也兩度に而は十兩にてはなかゝあからす一度六七兩以上也○前のことくにして御仕置をゆるしたるもの之内貳人は出牢後強惡を成たり壹人は人を殺して盗をなし一人は追剝或は捕方

之もの疵附たりこれをおもへは御法通りさつゝと首をきるかた却而御仁政かともおもへともさて入墨後百文二百文位のことにて而切もの多く出來てこまる也來月二日には死罪之七人あるといふわけ故に何分入墨後一度の小盜位は不便になりてゆるす氣になる也姑息の心を以大法をやふることにあらすやいかに新右衛門了簡御相談物也

○廿一日 曇 けふはいなり祭也屋敷内ながら雜人共參り居故に先拂の同心其外にて大騒也遠國のことみなしかり佐渡などにも類することありき○相撲場を馬場の脇の明キ地へつくる與力らの見物所同心共同斷家來共同斷に出來る奥の家内等は内圍の庭の土塀の上へ棧敷をかけまくうちてきやうくしきこと也大笑也おさとと相撲ははしめてみるなるへしいにしへはいろくのことありて賽物二十貫ほどになりてにきやか也といへ共今は嚴故に五貫文はかりなりといふ也郷宿より御みき其外御役所出入之ものよりいろくあける也與力共は御料理の御膳を一人より一

膳つゝあける也みな懸り同心共濡也けふ門前へあめやなと出るといふこ
 れも古來よりの事也○昨夜當月九日附之書狀來る先以一同御機嫌よきと
 の御事恐悦之至母上様より酒をたへ遊ひ候へとの御事御尤に奉畏候御養
 方實方之親よりみな酒をのみて遊へと之御異見ある子といふものも又珍
 敷こと也余事はともかくもこの御異見を逆しまにうくる子孫なき様に仕
 たき事也○新右衛門の日記馬術弓術共不相替御出精目出度事也廿九日の
 御逢は別段なること也親類より親敷御取扱とみえたり容易におもふへか
 らすわれなと以前別段御懇意の御かたありけれ共一度もなし○都筑に御
 逢御よろこひとの御事詳に承候十里外にゐる一年に一度逢か逢はぬかの入
 なれ共都筑出立して大にさひしくおもふは從來の懇意且遠國故とみえた
 り○友野先生よりわか詩之内に

母述肺肝書數尋共妻拜讀淚難禁初言待我常傷憶終記弄孫纒慰心

といふ詩へ先生の評直從肺腑中流出一字一涙と認めて來たり又秋夜有感

といふ題にて

讀書青燈下睡魔難逐驅憶昔受句讀鞭朴父誠吾々亦教兒日嚴厲守

遺摸如何兒共父永逝哀矣夫閑坐秋夜寂酒淚獨長吁

といふに先生評

不忍卒讀不求工而自工愈信不假雕鐫之爲眞詩

とあり其外に

志士終身所愛藏非書非畫在刀槍報恩七尺一團血欲以戰場爲北邙

與爲諂佞汗簪纓日在醉鄉過此生君看二十餘世史英雄誰得巧官名

などの類には御稱しなされ書生の文人墨客といはるゝ人のこときは出
 來ぬ也その上に書生めきたるはいや故に詩にかゝることをいふ也され共
 實情前の二首にはるかに不及故に先生の御稱しなきとみえたり○都筑吟
 味役になりたるとの事この人われより五年はかり遅く留役になりわれよ
 り二年はかり早く組頭になりし也人はいろゝのもの也賀として兼申

進置候通定也此ほとまてに肩衣地かつほふしをやりくられたるとおもへ共爲念しるす○矢之根は新右衛門のまいらせたる也楠の城あとより出しもの故何かに御造り候へ金剛山より出しは無相違事也○御殿の狂女さてこまりもの也右に御世話になり母上へ御厄介をかくる恐入たる事也いか様にもとり附かせ置て我歸りたらは満徳寺をたのみ出家さすへしとおもふ也眼中に心得ぬところあり乍去母上は不及申新右衛門之御世話くれくれ恐入たる也部屋親の親切なること中々親は不及さる事也よほとよき人とみえたりおさとと愚なる狂女とて文のくるたひに泣也○鳥居甲斐元知行のもの油を絞られしことは少もいはす只々家再興のことをおもふとは感心也あの人にしてこの民あり天下に賢人なしとはいふへからさること也後世にもかゝる人ありて折々後世といふ共天地いにしへのことし天地人といふにいかなればかく小人なりやとおもひては策勵する也右に付いふはいにしへ日本は邦縣のこときものなりしを郡縣に改

この軍役に
多くは關東
の人は遣ひ
たるもの多
みえたりと
詔にも關東
の者は面に
矢を立ると
立といふこ

られたりしを自然と當時のことく全の封縣とは成たり西土も禹か塗山に万國の諸侯を會するといふこと武王の八百諸侯を會するといふことにても三代の治は封縣にて今の通りなることいふに不及秦より郡縣になりて天下早くみたる也夫故に世々封縣と井田の復古のことは儒者の定言にて又いろくの論あれとも親敷手にとりてみぬ故に知らぬ也日本の今のときは堯舜の治に遙に過たるといふは封縣治故もある也一躰からより人質直にして且富み且小國も又よきなるへきか也われ佐渡へ行今にてもこの國一國計は郡縣治故にからの治めかた人情のことをおもひしりし也又ならへ來り世々與力共の江戸のことを露しらす近邊の諸侯の家來と縁組をし或は頼等を受て諸侯と公儀とのありかたさの辨別少きこと江戸のことは大に異なるをみて其味をしり又この鳥居かことにてますます封縣の難有ことをしりたり唐人の封縣のことをみな空論なるを儒者らはよきことにおもふも可笑事也夫に付又一論いにしへは日本もからも武士と

とあり萬葉
に兵部少輔
大伴宿禰家
持が長うた
にとりかな
く東の人は
かへりみせ
すていさみ
いたさけき
いくさとい
き給ひ云々
其外防人と
して關東を
出るものあ
うた多あり
けてあり

いふはなしみな百姓を遣ひし也今いふ役といふこと軍役の役を職の事に
うつしたるものにていふところ軍役にかり出して遣ひたるもの也源平共
に其奉行のときものを 王政の衰たるより引續てなして終に今の姿と
はなれりけり兵を農によするといふことをからにては世々よきことにい
ふなれ共日本のことく武士といふものには百姓は慮外すれば切捨になり
武器はわきさしよりならぬといふことになり居る故に一揆を起すときに
武士か行と直にきり平くる也よつて凶年のとき静也これらは儒者の論に
はいはぬ事なれ共治りのよきはこれもある也西土の一揆のことをみてし
るへし凡そこと水滸傳の様子にてもしるゝ也封縣はみたれても周のこと
くなくかつゝく也可尊事也前の堯舜の御世よりよしといひしは學者は笑
ふかもしらぬ故にこゝにいふは西土の治は申までもなく堯舜禹なるへし
三聖人つゝきて出て治め玉ひしもはつか二十年前後はかりに五子之歌
に黎氏みな兩こゝろありといふことみえたり周は五十年はかりに昭王

楚人に殺されたりしかるに二百年はや三百年に及ふに死刑になりしは長
崎奉行の竹中某牛兵衛 倅はかりに跡は御預にてすむといふ類江戸役人
大名之城下へ行たる時の取扱なかゝ昭王か膠の船にのせられて狸の仇
うちのこときめにあひしとは天地の相違なるにてもおもふへしかゝる證
あれは堯舜に過たるとしるしたる也この頃倭文を書たるうちに白王とし
るしたるを夏かけ皇と字を改めてこしたりよりて皇碧白の行草の法帖をみ
るに白としるしたるはなし夏かけに大に驚されたり新右衛門は書のこと
を好みり白はあやまりか否承度候關克明の風には必多くあるなるへし幼
年の時白日竹林中といふ草書の手本を父上の玉はりしにも白とありき父
上の御書に多くある也廣澤を好ませ給ひし故に必廣澤などの風かともお
もふ也手もとの法帖には更になし○母上 御殿に入らせられて御立派な
るに御驚のよしせめて 御對面所にても入御覽たき事也御表の大廣間御
黒書院なと程にはあらねとも 上の御勤御道具のときもの故に美をつ

漢土ニテ普
請ノ立派ナ
ルノカキリ
ハ榮紉普請
カキリハ堯
ノ茅茨キラ
ヘシコナレ
手本ニテ縦
令予カコ
トキモ宅ノ
キ事ナスヘ

この頃前田夏か
かうたの直しを
るに七干よに成
をよつてその直
を大意といふを
つくりの母上
御安心のため
細字

くされたるもの也予小普請奉行をつとめ又西丸の御普請懸をなし 上の
御普請所十に八九はみな拜見したり 御靈屋の御立派等は見合ては濱の
御庭などは至る御質素也御茶屋も五万石の大名の下屋敷の茶屋ほともな
し中嶋の御ちや屋八疊三間はかり吹上瀧見の御ちや屋八疊四間はかり也
濱の御庭には石も石燈籠も曾あなし御泉水の杭木只の丸太也大奥にはひ
しき竹にて御庭の溝の圍ひしたる所もありき 御世万々世の 上の儉な
る堯の土階三尺にやゝ同じきことかと難有おもふ也

○廿二日 晴 泉水少々の氷みゆる也○きのふいなり祭に奉納相撲あ
りたるに關取といふは江戸の二段目位の男也其外は並々の人のことし相
撲とみゆるは數人に不過且江戸よりは至るたるき也乍去立派なるまはし
に赤土俵入などありき近郷より見物來りて數千人のこと也馬場は左右に
廣き明地ありて五十間に三十間に近くあるへし夫はつめもたぬほと人
來りて見物夥し夫へ例の投てやるみかむ竹皮の赤飯等かりにつくりたる
みかむ十かこ赤飯五百つみ先例也

太鼓やくらへ上りて近習さふらひ等投たりしに數十人來りてこゝへく
とて押て太鼓やくらを押倒したりうちとめの二番は日くれかゝりたれば
表より高はりを多く出したりみなわか紋附也以上之事みなわか好まぬ事
なれ共仕かたなしされ共其入用等 上より被下るゝ御役高ある故に出來
且仕來ともなり居る也わか身の上にかゝる次第親なくは少し歸りたく
おもひても恐入たるわけ也難有事也相撲は三十番はかり也乍去大關迄二
番勝負に五分なれば三度とる也よつてけしからぬ手間かゝりて薄暮に
なりし也以前より與力の能其外相撲も例あることなれ共これ一事をいふ
とゆるみたるかことく聞ゆる也それを更にやめることはならぬ也高橋な
との事これに類することもあるへく流義をせず正法に先格を守り居てか
くの如し以前には與力等にまで役を申付て五十三次を作り茶屋を出しつ
くりものをなし或は琴のひき手をあつめたるなどこゝにて難有といふ御
奉行にはけしからぬ事ある也我をは恐るゝ故にこの位のこと也天地ひら

け初てより國をよく治めし人は子産と孔明也この二人みな民のわるくいひし也しかるを並々の人にも下々のうれしかる様にするは偽かゆるめてけしからぬ事をする人々也其人官を去りて目のある人か賞すまての事也民をみる事如子といふにあらすや正敷道へ引附て嚴ならすしてはならぬ也夫を下々いやかる也これ上たる人遠國奉行の事をしらねはならぬ事也遠國のいやなることこゝにあり

○廿三日 晴 下女まさよほと疫邪もおさと常にいふ遠國にては主従の心より母子のこゝろ也とて女共を不便かる故に此ほと其世話行届たることに食物を世話其外共所生の子のことし醫師は勝南院宮内といふならの衆徒にも御門主の御さじ并町醫に内上手のもの一人相談にゆくすりをもる也朝夕二度宛見舞にくる也下女の不快にゆく如しこれも恐多ことながら 公儀の御余光といふもの也當人とても宅にゆくはかゝる手當は不出來とて難有かる也下女共一同姉妹の煩ふことく力をつくして介抱

する也なるほと遠國にては人の心別段になるとみえたり

○廿四日 晴 まさよほとわるし傷寒故大さいこにても行たき所なれ共何分かるき藥也しかしなら一番の 御門主まで引受居る人の外の醫とも相談を上することなれは素人のしるべき所にあらす醫者の後世家といふ号は元來なし古法家出來しよりのことなるへし其後世家といふものも近來附子大黃をもるなれ共至少々にて指にてはしくかことく成ことをする故に終に死にいたる也其上たとへは傷寒にも咳か出ればせきを手當をし元來一毒の品々を變をなすに其もとへかゝらすして其末を討故に醫の術盡てやまひは平氣也譬之に惡黨ものあるに其惡黨をうち殺すことにはおろそかにて惡黨ものをいらくの惡事のふせきをするにおなし禪語に獅々といふ獸に石を打つくれは石をはみすして其人にかゝる也余獸は石をかむ也とあり此ことこゝろの修行の場にて天下のことを正しくするは千万のことなれ共大人は只其君のこゝろを正しくすると孟子のいひた

ると同こと也醫は大黃附子自由に遣ひこなし書物に不拘して世に行る、
醫を親むへきこと也川柳に

大通は細見を買てみす

といへり手に覺あるものはさまてに書物にかゝはらぬ也中嶋三郷の説に醫
の陰陽五行を論するものに上手なしと確論也われ佐渡に而家來の傷寒を後世
家にまかせて残念におもひ今又其ことに逢也よく法を遣ひて法に不泥場大切
也孫子十三篇變化自由なることをときながら本すじをはづすことなく卒を
以應すといふを徠翁か太宗問答を引て本の字の誤也といひし味なと絶妙也
○廿五日 晴 まさ不快一昨日より次第に悪敷昨日はこし抜て無余義ふ
くさものに而とる也とても六ヶ敷とおもふ上に小便閉の難症を發したり
勝南院宮内へとふに難治にて脉躰あしく今朝より虚脱キヨしたり追々いくへ
からすとて醫者みな大に困りたり下女共一同そめなと涙かたてにていろ
く世話をなす也おさとは日蓮へ百度參りを庭にてふみ日蓮宗ならぬも

のへ申付て二月堂の觀音を拜させなとする躰みるへからす八ツ時頃勝南
院へくたを以て小便をとれといひしに其具もあれはとるはやすししかし
直にたまりて役にたゝす其手當の藥也とて猪苓加附子湯といふ藥をもち
たり夫を二ふくのみしにしはしありて猪口に而一ツほど二度小便通した
り六半時頃小便又通してふとむの外へ流れ出たりとて女共衣類にてもも
らひたるさわきにてはしり來て告る也無間右之旨勝南院へ申遣したるに
五ツ過に同人また來りてよくみて少々見直したるかことしとて歸たり夫
を夜中三度小便の通しあり今朝は虫のとき聲に而かたくり湯をくれよ
といふ故に遣したりしはしありて小便に行たしといふ故にふくさものに
て昨夜のことくせよといふにおまるへ行たしといふ故に女共抱てやりた
り又しはしありてそうめむを食たしといふ故に爲給たるに三十筋はかり
給たり追々に醫者共來りて大に立直して先ツ死にはいたらすといふ也昨
日の八頃は醫者もさじを投たり右之かるきくすりに而蘇生せしこときも

の也附子の大功あることかくの如し昨夜一さじ違ふと明日は死にいたる
躰也こゝは六ヶ敷もの也けふは其薬をもらし勝南院は鼻ひこめかして歸
りたり人の生死のはかられぬことかくの如し右にゐみな少々笑面なとし
てものかたりする時五時頃六日限の宅状來る狂女のこと前にもいふ通の
父の眼かねの通々次第しはし早過たることなから兼而覺悟のこと故さし
ておとろきはせすおさとをよひ書状をみせこれ計は異見無用とて返事を
認て出したりおさとよりも一封といふ故に今夜は存寄ありとてさし留た
りこの日記するす時四ツ時に成たり書状は御兩親様へも入御聞おさと并
用人共にも申聞かせたり

ものゝふの直くに立行みさほには正なきこの葉しはしとゝめす

欲致吾雲路慈親盡劬勞何思姑息愛爲變士風操

今夜は七日精進のうちにて酒はのまぬ日なれ共例のいさゝかなることあ
りてもねられぬこと故寢薬のかくにゐ酒八ツをのみたりおさとゝのはな

しにわか三年來いろゝのことに逢はいかなることかとおもひめぐらせ
は又新右衛門か甥姪其外わか事によりて苦勞するはこれいかなることな
らむわれは遠く却而新右衛門はみつから其事に逢いかにともいふへから
さること也とてとりゝ言あへり新右衛門を苦勞まだも可なりお千惠の
其手傳する氣のとくさいふへからずとおさといひ出てこれは果てゝは
なみた也彌吉か失せしときと違ひ市三郎大に歎息して氣をうちたる躰也
夫丈としをとりし故なるへし

在旅三年亡二子遙思慈母却傷心千辛万苦一朝夢吹落狂風楓樹林

狂女ことに付千辛万苦のおさと夫に付而は金銀も夥ことなりおさとの衣
類など遣したるも不少しかるにこの次第憤怒しても仕かたなし只母上の
御つかれと成てはわか身の仕かたなし新右衛門幸三郎よく別而心附御慰
あるへし世の人は悪事をしても身の全もあるにさしたることにてもなく
いはゝ子ともめきたることなれ共仕かたあしければ決してゆるされぬな

り歎息のかきり也狂愚の極也され共今一段けしからぬことなどをすると別る恐入る也事少なるかまたもよき也

○廿六日 晴 病人段々死に遠くなる也○けふより春日の御祭はしまる當坊の田樂舞あり古雅ことのこり居也去年みてしるせしことく也○けふ當坊の行といろくのもの給させ行よりかへるまで給つゝけ也春日祭には物くふこと多しとて家來共笑ふ故に詩經にも神飲食をこのむといふことみえ祭に酒を用ひよといふこと書經にもみえ詩經中のまつりことごとく食飲みのこと多し田の神をまつることなともあれは田樂舞も又謂あるへし先祖の法事には必多く給物をつくりて人々に給さすへきこと也川路内藤井上とも實は 行道院様の御力に而興りしことなれば養家の先祖に准し祭り奉りたきこと也内藤はもとより元祖のこと故論なしこの事追る考へし新右衛門も御考あるへし

○廿七日 晴 春日の御祭也例々通十萬石之格といふことにて茶辨當茶

道などにて鍵五本爲持也○春日のまつりには唐の風俗をおもふ也女みな馬上也樂人共馬上にて奏樂也さる樂田樂は歩行也金春實生座之開口ありて一さし舞也田樂はいにしへの姿はかり也本坐といふは坊主新坐といふは惣髮也本坐新坐の田樂といふこと太平記みえしかと覺ゆる也樂人共はみな馬上にて壹人日使といふものは大臣家の裝束これはいにしへ關白殿下の御名代勤し例と 一乘院宮の御はなしありし也其余は五位の束帶也みな冠の上へ黄しろおもひくしの白を一二輪又は六七輪ものせたるかことくみゆる也これいにしへにいふかさしといふもの也今のカンサシこの遺風也髮サシにても上サシにても同じ意なるへしみな冠りへさすこと也カンサシ冠サシにてもよろしかるへきかしかるを今の人は刀をかかさす扇をかさすなどいひて頭の上へのするかこときことにいふ故にさくらかさしてけふもくらしつなと大成枝なと肩にてもかけたることくおもふもあるか也大に誤也古學の人はみなしるところ也樂翁殿のうたに

武士のかさしにせよや紅葉ははちりぬるころそ人にしらるゝ

なと何とかおかしく聞ゆる也其外樂翁殿には疑へきこと多し夏蔭翁な
と毎度惜まるゝ也玉にきすなるへし簾に梅さしたるといふ意のことく歌
聞ゆれとしかし士に五位以上束帯なれば全のかさしとしてもかなるへし
○唐朝の風は女みな馬上也玄宗の頃煬帝隨の夫人にてもしるへし日本に
亦も慶長迄はみな馬上也部ちや春日などいふ局衆みな馬上なるへし其こ
と徠翁の説ありと覺し也○春日のみこ八少女オトメみな馬上也白きかつきをか
ふりはかま也凡の躰大森彦七か負たる鬼女のことし俗にいふ般若コレハ
元來佛語の也うつ袴といふものに似たりみな夫あるものなればおりゝ角を立て般
若つらもあるへし其節は此裝束ならば其まゝ彦七に負はれても差支ある
まし馬みなゆふをつくる也ゆふといふはかみにて切し關東にてしめとい
ふものに似たり吉田家の許狀のゆふたすき歌にはなのしらゆふゆふつけ
とりなどのゆふ也けふは九十五疋といふは百姓共みな馬上にてけふはい

オトメ
オトメ
オトメ
少女乙女と
かくは誤也

かに落馬してもいにしへより怪我なしといふ故にみなけしからすさわき
ていろゝの曲をしなから生酔などの馬をかけさするみな見物あふなく
おもふ也なかには半臂かハンヒハンキリといふ能裝束の肩など着たるも
みえき大笑也いにしへ上杉の士にハンヒハンキリを大坂陣に着たるもの
ありしに上杉の士古風也鎧直衣をきたるかみゆと御稱しありて其人大に
膽を潰したるといふはなしありしと覺へし慶長の頃までは古實の穿鑿は
なかりし也大和國中の諸侯を奉行所を觸當にて大將馬といふを出す壹万
石壹疋位の凡當りなるへきか郡山は十五疋といふ故かゝなるもある
也いつれの大名にや馬面かけしを出したり馬面といふものは畫の龍のこ
ときもの也からくらの時はかくるかとおもひし也只の乗くらはかりに而
かけてもくるしからすや疑へし陣中馬の仕立ならば面あらは馬鎧かけた
きものかいかゝあるへき當時からくらの裝束馬の馬具あるは日本中東大
寺の八幡はかりかよく所々を寫として來る也○馬面はかりかふりたらは

冠り計にても、引半てん着たるに類することはあらずやこの古實人に聞
たきこと也かゝるときに田舎はこまる也新右衛門の馬の先生の御心得は
いかに小笠原に御逢候は、高しま千はるなどに御きかせ可被下候いづれ
小笠原の可喜躰のこと也春日まつりの千はやといふは白布にて長十間も
あるを社人かかたへかけて地を引せなから行也

○廿八日 晴 春日後日の能に付罷出る例のよやまかせ也途中を見物夥
し當年はけしからぬ見物也三十年來なしといふならのはたこやいつ方も
充滿せしといふ也このもの共奉行の供立のよやまかせを見畢るとみな多
くは歸る也能見物のものは十分一もなし春日の御かりやは春日山の内方
百間前後の芝地へ松の葉にて御やねをふき御はしらはふとしき皮つきの
松にて高欄其外みな同じ高欄等は都あまこをもてまき或はしきてあり
其前へ沓をはきて白衣烏帽子の神人共居る也學侶方の寺僧は白き衣にて
白きけさをかふる也目はかり出して全の辨慶の畫の通也衆徒はくろき衣

に而首は學侶に同じみな太刀を爲持也學侶のちこは精好のはかまにくろ
き菊とちのあるをはき紫などの衣類或は模様あるに白をかさね着て懷よ
りたたうかみを出したるか並居さまいと古めきてみやひなり堂上の子な
らては學侶にはもらはぬといふ也五半時迄に能はすみて歸りたり歸りに
みれば與力同心其外よりわか供廻り等一同を以數ふる挑灯みなわか紋附
也これも 公儀の御恩と輿中にて獨拜をして歸りたり

○廿九日 晴 はしめて泉水へ全氷わたる尤四過にはとけたり三十六度
の寒也○御兩親様おまきに慈愛の加へかたはあらずやとておさとへいろ
くくと仰られて難有御事也かしおさとにも案しなくよりて御機嫌あし
くおさとも手をとる躰也難有御事也みなわか不徳によりて實方并御養父
母さまへまで御世話をかくる也夫か爲におさととはおまきをかなしむ
とにて胸ふたかりとかくに頭重け也きのふ供の内へ加て市三郎に神前
能をみせしにおまきの事もあるに市三郎を能へつるゝこと又御意にあた

りたりこれみなおまきをあはれみ思召より起ることにていとく難有恐入奉る也おさといふわれは人目よき因果人也とはこのほとおまきらか事によりてしみくとおもふといふ也同人の不孝數へつくすへからす

○卅日 晴 又寒ゆるみたり○病人少々快きかたなれ共元來大病故肥立遅しけふしるこを給ひしといふ女共食氣ありとて大嬉也はつかに白玉三ツとつゆをよほと吸しといふ也醫者のはなしにては先此ほどの躰にては氣遣ひなき方々や、向ひしといふ也江戸の醫者と違ひ小便より啖迄みな改て見行也けふにて二十日に近く大便の通しなし小便晝夜に四合はかり出るよし也後世家の薬みな如此食薬のなきはつ也○けふは春日のひもろき來る兎狸雉子也其内にくさりて皮のとろけたるもあれ共先約ありてみなもらひ行也難有かりてくふ也少もあたらすいろく奇効あるといふ也所司代御城代京都町奉行 禁裏附までへくはりの飛脚を差立る也京尹のはなしにならぬくはりくると用人はなをつまみて披露するといふ也左も

あるへし蛆を生すせしも有也狸のくはりは所司代御城代并京尹に限る也臺所に如山積とも奉行所にては誰も食するものなしされ共ひもろきのひらきありて與力より同心共門番其外迄用人より中番小遣迄酒を出す也凡酒の三斗もいるへし料理いつも四五兩かゝる也ひらきの膳肉をくふ人はなき也狸は少々食はるれとも其余のものに可食ものなし○われこのほと至る健にて病氣なしけふもおさといふはもし書物をよます樂しむといふことをしらすは此ほとは必疽を背へ發するか或は血を吐なるへし然ルを少しにてもこゝろに結ほることあれば恥辱とおもふ故かきして結ほることなし故に病あらぬなるへし身の上の苦のうちにわか侵さす思はずして來るは天のなすことと畏てうくる也故に身にあらぬ也

○十二月朔日 晴 月並々禮受ること例の如し○けふ貧民救ひのもと、して市中のものに金百兩くれ遣したり元來われこゝに來りしはしめより

貧民救方之手當なきを歎しているくせしかとも仕かたなしよつてくれ
く、に少々手もとより遣したれ共われ奉行中のこと故に其旨さとしたる
に身分宜ものより二人して六貫目出したりよつてこのたひわれより六貫
五百目はかりくれ遣したり右に付又市中之もの共々五百目三百目ツ、に
て七八貫目出す也なら市中貳万五千人之内當日くらしかね候もの百分一
と見積其入用三百人はかりへ右之二十貫目はかりの利を遣せは年々二百
五拾人之もの困窮之節金を少々なから遣はさる、也永世のこと故に少か
らぬ也百兩の金少々の事なれ共人に救としてくれらる、様の身の上とな
るといふも 上の御恩也とおもひて難有あまりに落涙したり新右衛門等
も知れる通身上もよからず物入も多けれ共時を失ひては出来ぬ故にかく
はせし也しかしわか私恩をうる様にてはいかゝに付小書院へ惣年寄を呼
出して與力立合にてわたし遣しいつれともせよとて渡したる也これをか
れらかもと上ヶ金にするなるへしさすればわか名はいつかたへも出ぬ

也○けふ万葉をしらふることありてかの書開卷第一の 雄略帝の御うた
をみてこゝろみに糾しみに 應神帝の十六年に百濟より書物はしめて
わたり夫々日本に字といふもの専らに行はれし也夫々 雄略帝の元年迄
百七十二年也日のもとのことうかやふき合せすの命の頃より 應神迄の
ことは神代卷古事記等あれ共 神の事に凡夫には不分 應神天皇より
そわれ等には凡にもしる、也されは書物といふもの出来てより二百年に
たらぬ時のうた也万葉の尊ことをおもふへしからの詩といふものは殷の
宗廟の詩少々と周の詩にて黄帝の字をつくらせられしより千年の余を隔
てたり書經はふるしといへ共左傳に夏書にいはいひこゝにいにしへ
の帝堯帝舜大禹といへは夏の世の末にても出来しなるへしいつれにも禹
より後なれはこそいにしへとはいひたる也それを以おもへは黄帝より六
七百年前後いつれにも五百年の末のもの也夫々いにしへのものはなし易
に伏羲之天下に王たるるとき八卦を畫してとあれは只八卦はかりのこと、

みえたる也しかれば割合にしてみれば日のもとの書物は古きものゝ傳はれる也可尊事也何分にも歌の捨られぬはこのわけ也書物なき前のことは孔子にてもよくはわかりかねたるとみえて書經に堯典をあけられしはかりなり夫らを以おもひても後世よりは書物なき前のことは神ことゝして日本紀古事記のまゝに守にしかぬ也からにても天地人の皇のころは壹万八千歳といふことを後世よりいひたる也こゝろあるものわか子孫に出て決る 應神天皇の生させ給ひしより前のことを論すへからす白石先生なとの論あれ共勿躰なき事也みな神の御事に而凡夫のわからぬことゝおもふへき事也からのことは秦の火ありて聖人の書に全きものなし日本には書物出來て二百年來のもの其まゝ万世につとふるといふは難有神國ならすや

○二日 晴 夜に入て宅狀來る狂女のことあれはいかにと驚てみるにかはりたることなし段々と新右衛門か至極深切とも何とも可申様なき書狀

おさとによみきかせたるにおさとは只なきになきてやれといひたるはかり辭なし新右衛門厚意いふへき様はあらず此ほと何もかもまかせ切之事故此度に限いなとはいはれす乍去いつれ五月に不相成候はわかおもふ様にはならず夫迄之義は先ツいたし方無之候間いつれとも御取計可被下候其内は牢内同様之御取扱にて可然候よしや等之沙汰は上の御人にて難成とも其余少も御用捨之義くれ〱御無用右は先便之趣に而御勘辨可被下候○母上様御機嫌御當りは不被成哉とて夫婦一同朝暮のはなしよつて昨日御容躰伺之書狀奉呈たりしに果て御持病氣と之御事恐入たる事也○汐留へ墨之義此次差立可申候此度は又一段よく出來たりすりくらへても唐和之差別不分候○新右衛門御大小出來之由御浦山敷候此地へ來り刀劔の念慮おのつからに消滅したるかことく却而ほしきものなくてよき也○新右衛門の馬術弓術驚歎感服也けしからす暖也中數二段弱しはるの如し○三日 晴 病人少々見直したりしかし廿日はかり大便之通しなしとこ

すれなと出来て放心したる躰也けふは初而飯を少々食たりいかゝあるへきおさとなど不便かり手をつくす也日々精進にて御百度をふむ也夫にて其余を御察あるへし下女共みなよくする也魚類少々給たきとの事にて醫師もゆるし故に小鯛を急にとりに遣して下女共打寄たうへさする故におさと一同に而のそきみ居ひるに無勿躰起返りて給たしなといふ故に本症のこともある也醫師は先ッは死をまぬかるゝなるへしと三人共にいへ共無覺束もの也しかし四五日先ッ同篇之内に而はよき方也

○四日 くもり 少々さむし中々氷の沙汰なし○病人大によしけふも粥を二度給たり此躰ならば快方なるへしとおもはるゝ也醫師も一同にいふ也四五日以前よりはよほとよしとわれよりも左もあるへくとみゆる也京都にては新潟奉行御普請奉行被仰付其跡は止に相成候由之風聞ありと市三郎寶藏院之稽古場にて聞來れり○なら市中之もの共々少々貧民救之内へ加入いたし度由に而昨今來追々申出る既十貫目はかりに成たりわれ百

兩吳遣したるを聞たるとみえたり大學に令する所其好むところに反して民したかはすとあるをおもひあたる也

○五日 晴 此節醫者日々數人來る故に御役所之花井隆助悴にはらをみもらひしにいふは御奉行様は御出精はなさるれ共御はらは至而御虛弱也と父のはなしに承りたるか左にあらず隨分御丈夫の御はら也いかなれば親なるものは御弱と申上げむと不審して申たりこれは諂をいふよとおもひければ勝南院宮内にはらをみもらひたるに以前見たるとは大に違ひてはら健に成たり小腹などよくしまり居るこれにてはよろしといひし也わかこゝろにては變りたることはなし併醫の申によりておもへは日々の如くくさめをなし月に一兩度母上の御持病のかけのときことありしか當年は一度もなし丈夫は丈夫になりし故なるへし三年前は心を取廻すことならさりしか當年は少々夫の出來る故なるへし

○六日 晴 けふの白洲に身元宜もの男子無之娘へ目合養子をいたし其

身は別宅いたし居候處大病に然ル處以前圍妾に出來候壹人之男子困窮
いたし居候もの有之右之もの看病いたしなから困窮の事を申したるに簞
筒之内へ入置たる二三兩宛の證文都合に五兩はかりの證文其外有金
等惣高百兩に不足ものをもらひ候由にち歸りたり然ルを養兄より盜
賊同前之由を以願出ていろくと申争也段々吟味してみれば訴狀差出た
るは養父没後々七日目也われ大に怒て公儀に奉行所を立被置るも
不孝不弟のものなからむ様との義第一也われこの出入之是非を不糾先ツ
人倫をとく也汝か身上は二百貫目位之ものと聞也夫を脇を養子に參りた
もらひなから隱宅之金子百兩に不足證文等を養父之實子に困窮もの
持歸りたりとて親之喪をも不勤候而七日之内に奉行所へ願出るとは何事
そや纒之金之ために再ひならぬ喪を破るこれ大不孝にて少も親の死せし
を哀しまぬよりの事也又妾腹の弟は親のくれたるといふは死人に口なし
よしやくれたりとも跡相續人養子に付其ものに對し親子差向ひにてはす

る不義也親の不義を金に迷ひいさめぬといふは死行親をも金のほしきと
いふ心得にて是又養兄に不減不孝也二人共に禽獸也同心共この二禽獸を
いましめとて被縛て段々利害之上兩人共入牢申付たり○高橋の祖母君失
給ひし後のこりしものを母上と左助殿と互に御譲り合候而御とり不被成
事ありき是非上ケたしいや一錢もいらぬとの御事などは潔き御ことなり
きけふの目よりは聖人のことし

○七日 晴 いな遠州御用 召之旨吹聽來る○けふいせ人宣長か古事記
傳をよみなからおもふはかれいかなればから文をよむことをいたくそし
りてかくはいひけむ解せぬこと也かれか尾張か紀州より治國のこと御尋
にて了簡をいひし書一卷あり夏蔭翁よりかり寫しあり夫には第一に書物
をよみからふみに明ならずしては國の治ならぬとの意あり夫なからかゝ
ることかくはいかに其外孔子の御事を孔丘など書たり人の名をいふ
こと日のもとにてはから程にはあらず別る古躰うたなどにては少も構は

ぬ也しかるを人の名いふはよからぬと迄に師の眞淵翁意に背たること玉
 あられといふ書に出しなから孔丘などはいかなることには有らむ元來か
 らふみ學のことは 應神天皇の御世よりはしまりて世々の 聖帝のこと
 に御心を被用られ終に 御即位の御式には十二章の御衣をも被召其さま
 みなからのことくにて日のもと御式とはみえすこの事當時以しかりと
 みえて昨年の 御即位の御次第などにて分明にしるゝ也年号のこと 天子
 の御贈名などみなしかり殊に 天子にても釋菜釋典の禮を被行て 天子の
 御事はしらねとも關東にては 御名代の御拜もある也予 聖堂の御普請懸
 を勤て 聖像の上 迁坐に出しに却る上野 御宮の御格に御老中も石た
 ゝみの上へ平服也かゝる御國の民にありなから孔丘などゝは何事そや死
 罪遠嶋の刑は不遁もの也以前大學頭の門弟に三好野といふ盲人ありて宣
 長らかことをいたくそしりて和學者流と大に争ひしなどの風返しの風な
 といふ書共もあれ共互に遠く書物上のことはかりを論して一向にかれか

わが師夏が
 けは平春が
 海は弟子に
 てはみはに
 眞淵が弟子
 也直長は眞
 淵の弟子に
 いふことは
 わか師の意
 に背かとも
 ちの師は將
 軍の御人な
 らば御軍
 の御法を尊
 ぶた長を無
 余義宣長を
 あしくいふ
 らしとも苦
 しか

説の病にあたらす互にいひたきことのみをいひて既に聾の口論に似たり
 と其ころも人の申したり書物の上のことはともかくも 天子 將軍家の
 御法をさみしからふみよむものはみなまかつみといふ邪神のわさ也とま
 てにいふはいかなることによからの法によればわか國を第一にする聖人
 の教なればみつから小國或は東夷などいふはさらにもいはす唐物このみ
 するなどはよからぬことにて則聖人の教におのつからそむけるなれ共唐
 より末 天子より遣唐大使をとめられし後のことはともかくも別而當
 時之清朝などは日のもとゝは違ひ夷國となりたればいかにともあれ物學
 ひに行上はかの國は師也匹夫も師を尊ぶものを其禮をうけ其法を學ひ
 たるくにを悪さまにいひ穢してはならぬわけ也こゝを以三好野檢校など
 論したらは 天子 將軍の御光にて少も論に争ふことはならぬわけなる
 也あまり遠過てをしき事也きしかるにうたよみに無点本よむ人は十人に
 三人はなしよつて宣長らかいつはりをはしらすからふみといへは異法の

ことくおもひ或はしりなからも朝夕のたつきの爲にあしくいふもある也
かなしき事也其外和歌といふことは古今の序にも大和うたはと書出して
ふるきことなるに唐詩宋詩明詩などの類にからは世の興亡あれば其國號
をいはねは時代わからぬとの眞淵翁の説にて和歌とはいはぬ事なれ共万
葉にもうたのことを國詩といふ所ありしと覺今も既に詩はからうたとい
ふにはあらずやからうたといふものあればからへ對して大和うたといは
ねはならずそれはからの錦ある故にやまと錦の名あるかにてからなてし
子大和なてし子唐竹吳竹日のもとの竹は皮竹といひてわかち其外源の順
か和名抄の類しらへたらはいくらもあるへしこれ前にもいふことく西土
のことを專に用ゆることにて並ひ行はるゝ御國故にからやまといひて
わかたねはならぬ也唐墨和すみ和學漢學和漢朗咏集の類にて無余義に出
づるもの也しかるを西土の例を引て和歌といふをいむはいかゝなること
也古跡にても懷帝は歌の書法第一のものなるに夏かけ翁はしめ詠何々和

歌とかく也いかなることによ

○八日 くもり 少々氷はりたり夕かたより雲たち夏けしきになり雨催
にて暖氣也○きのふ迄に惣年寄へわたす荷物例をとおさとかゝり也この
頃の心配にてふさきかちにて衰たれはいかにとおもひたるに先ツたをれ
もせずつめ合せ等出來たり以前にこりたれは一昨日より地黄をはしめた
り醫師にみせしに薬のむ程のことにはあらず唯心配をすくなくせよ案事
ること第一にあしゝといひたりしかしこれは第一に六ヶ敷こと心配する
も狂女などのことを朝夕にいろくいひもし患ひもする故也きのとく也
○九日 くもり 大に暖氣也やりのすききをして汗大にいつる也けしか
らぬ事也けふ詩經の常武の章をよみて王のいくさのとき事は鳥の飛かこ
とく山の動かすへからさるかことく川の防へからさるかことく敵にたゝ
るゝことなく連綿としてつゝき敵より亂さむとすれとも亂されすはかる
へからさること底しられぬ水のことく陣法整々として勝へきのすき間少

しもなしといひあるをみて予か好みてよむ孫子十三篇の妙理既に詩經にいひつくしあるに驚たり詩書は義の府也などいひて春秋の頃の人尊ひしも尤なること也詩經に文王の師に今の軍學者のいふ龜甲車といふものみゆる也孫子にいふ輶輜といふもの也これにても文王周公などのいくさの上手なることをしるへし日本に亦は以前なかりしか加藤清朝鮮攻の時はしめて用られし也牛の生革にてやねをつくり棟は大綱にてつくりし先ツいさりの車のこときものなるへし堯の徳を稱し奉りて則武則文といひて武こそを先にあけたれ易にも神武といひて文とはいはす書經に文徳をおさむるといふことあれ共軍事に付るはなしにて文事といふことにはあらず醫書の文火武火といふかことき遣ひさま也この頃詩に

稷契不爲讀書事天功亮得煥乎摸人情文過日輕薄仰看慶元赴々夫。

といふ詩をつくりし也慶長元和の人々に四書をよみし人少しそれにてこの一天下の太平をなしたるにはあらずや文武とはいへとも文事の勝は

好まぬ事也曾あきく清正晩年に論語をよまれて大に後悔されわれ早くこの書をよみたらは益多かるへきに残念也とて常に論語をよまれけると也かくよむものをみな身の上へ引附て實事になしたらは書をよめはよむほと益多きを書物をなくさみものになして別事にする故に害になかる也唯今の詩文にふける儒者といふものは至る無益なるものにて猿樂も同様なるか多き也其内江戸の儒者はまだも氣韻あれ共大坂などの儒鴻池鹿嶋などいふものを江戸にて加賀さつまをいふことくにいふ土地故に儒者にも其風ありてこの額は何処この文章は何兩といふことく價を極めてかく也江戸にはさすか其ことき事はなし京師も大坂と伯仲のことくきこゆる也公家衆みな錢にてもものをするにて其余いふに不及事也からにては錢をとりて文を書こと三國志の頃よりみえたれ共さしての事にはあらざりしとみえて其ことを惡敷いひたり唐宋の人は大儒先生といふ人みな錢をとりて文章をかきし躰也明にいたりて李東陽か宰相をやめて後頼に人の望

にまかせて書をかゝれたるに門前市のことくに人來りて書を求たりりと
也ある夕かたにちとくたひれたればやすまむといはれしに明日は客をす
る積也其肉の代少々不足なれば今少御書なされと妻のいはれしによつて
又筆をとりてかゝれたるといふことみえたり東陽は御役をつとめて錢を
不貪は美談にて子孫のまでこと足ほとに貪ものは天地の隔なれ共かゝ
る身からの人にもかくの如し江戸などの儒には其ことなし日本は士氣
のあることゝおもひて常に誇り居たるに今上かたの儒の躰をみて追々に
かゝる風俗になるへくとおもへは歎敷こと也人は錢をほしからぬにとゝ
まる也しかし日本にゐは世祿にて慶安の御觸ありて武器人數の御定あり
少も減することは不忠の一つなれば夫たけの覺悟はなくてはならぬ也
○十日 はれ 暖氣也金魚少々宛浮尾ひれを動かす也○御役所の門前よ
り玄關并外廻り或は馬場は穢多のもち也馬場に石多くしてこまる故に砂
をしかせたるに穢多共出精して馬場のふろくを直し其外草むらを刈平け

たれば七拾貳間余の馬場と成て高サ二間の大土手かさにあれば馬にても
鍍炮にても大的にても何にても出来る也大名にも脇坂の馬場ならてはか
くは參らすしかし式の七間はかりもある土手は出來ぬ也其土手の上にさ
くら梅まつあり秋は尾はなことによし

○十一日 くもり 寒の入なれ共暖氣也所司代來四月御參府之義御伺被
成候處伺之通被仰付候旨之御吹聽來る左もあるへし○女御入 内濟之御
能來ル廿八日有之候由也關白殿下などにも右恐悅之御能有之候由に承
る武家之猿樂官家之うつりたるもの歎不審也

○十二日 くもり 少々氷あり雨 御門主は寒中に參る○けふ白洲に
前々記す兄弟出入之兄之悴出る十五才也といふ証文之有所其外とも夫々
に辨別して本家并親之申分と別段之了簡を出し牢内之應對を願ひて伯父
之心得違を申諭一言もなく伯父を申伏たるさま家來共一同肝を消たりみ
れは立派なる若者にてちや木綿紋附之綿入の羽織に三寸はかりの肩あけ

あるを着居たりこのもの才市三郎などに半分もらひたし
○十三日 晴 すはらひなりとし男のしめ麻其外はふくさ麻例を通ど
をあけなとありてわかまつさまと女共のことほきいひてさゝめくさまと
しのうちなからはるめきたりよいささツくさとうたふを聞くにこれ古
言なるへし神代奏天の岩戸のところにも笹の葉をもちてサアくと女神
ち^乳を出しほとの上へひもをたらしたるまゝ躍たまひたれば八百萬神の
わらひたまひしといふこと正史にあればほゝを出したるをみては神さま
も笑ひ給ひて興し給ふこと也この躍るうかれてかしこくも 天照御神の
再ひ 御世照し給ふことなれば日のもとに神の傳ふるところにボ、ほ
と尊きことあらし日のもとにてボ、の論いさなみの御神日のかみを生給
ひてかたしけなくも御ボ、を焼ケどましく其御ボ、くさりたる所谷と
なり今またくらはしめをあらはし日の御神とすさ男の命とかしこくも
御夫婦の御喧嘩のはしまりをなし給ひし時にボ、のことみゆれ共織女の

ボ、へはたをる梭といふもの突込たるあやまちのことなれば目出度ボ、
とはいひかたしこのわらひたる神の御ボ、や目出度御ボ、のかきりたる
へし因にいふボ、もと御ボトとありボトトハボヲトヲの音にて轉せし也
いま鍛冶のほといふもの實はぼゝの意なるへしものを生し出す意あり
日のもとかみいさめにボ、を出すといふたしか成ことは和泉式部か貴布
禰社にいのりの時に前をかきなて三返めぐりて御供せよといはれて和
泉式部顔うちあかめて

千早ぶる神のみるめも恥かしや身を思ふとて身をや捨へき
とありこのこといまもありて照るく坊主に女のボ、みする或は針を失
ひし時ボ、を三遍なて住よしの云々の歌よめは針いつるなとみなふる
き傳へそかし 天照大神さへもボ、踊の大わらひにて天岩戸より引出さ
れ給ひたり女神にてもかくのことし況や凡夫の男をやボ、こそ心引出さ
るゝかきりなるらめ以上古事記の説にて少も私意を加へず

○十四日 晴 きのふ馬場皆出来也改みれば七十間あり夫は五寸通砂をしき一尺はかりの水はき溝を掘りてふちへ芝をうゑたり驚るゝはかり出派也兼るは三拾文はかりやるへし少々砂をしき石をとりてよとなといひたる故に右々次第日々二十五人余の人数來りたること故に捨置かねて並酒一斗に錢三べ文遣したるに冥加こゝろにていたしたる事故にもらふ義は堅く御免といふ故に利害をいひて遣したり元來與力共に馬場なし以來は與力共とともにのるへしといひたるに御役所を以又五貫文遣したり穢多共殊々外の難有狩也年寄共みな禮に來る也與力共願ひて郡山の師匠を呼て乗初をきのふしたりき穢多かくいふ譯はこゝへ來り穢多共へ相當之仕置申付候様申渡いつ方之穢多をも引渡す様になり其上革細工の仕かたを段々申付て甲冑鞍其外之ものみな穢多共仕覺て鞍は銘物か成大坂にて開板の大和圖にも乗たりとて殊々外の喜ひ也と也過に劔術と槍の稽古とを兼たる胴をつくりたるにわか着料也といひたれば牛皮三枚をか

さねてつくり胴丸のときものを三百疋にてつくり來たり頻に難有かるよしをいふをいつはりとおもひたるに馬場の躰ならば偽とはおもはれすこのほとわれ京都へ行風聞市中にてある故に市中之もの共所司代は御免願するといふことをいふ也例のいつはりなるへし遠國之奉行所にこの手あること也其手はいはぬ也長崎はことに偽多き國故にたのみて出立のときおくりもらふといふ也げろの出るはなし也某の人はけしからぬ勤向に而驚居るに其人はかりは春日へ市中より石燈籠をあげありさらは市中にてよく難有かるとはみな 公儀の御法を等閑にする人を歡ふなるへし子産孔明のときさへに民はわるくいひたり其人のあるうちに稱するは偽ならねは多くはあまやかす惰弱の人々也

○十五日 晴 三十四度のさむさ也池氷はりつめたり○この頃与風おもふは脇坂中務大輔殿御老中御勤の時われは御咄には田安一位殿何か御喜ひのことありて千枚の大黒天の像を人々に被遣其内二枚ツ、御老中若年

まり無間もなきこと故に其頃はわれ佐渡在勤中なりしかこと知らぬ島人共は殉死なされしことくに風聞せし也畢竟公の御ことは天下にきこえ居れは大草能登守はなしに長崎にて中務殿寺社奉行再勤坊主共大に恐るゝはなしなと唐人屋敷までも聞へて謬傳て生釋迦イキシヤカ中務といふ綽号アダナなりと異國の人は思ひ居りしと也異國まで聞へてたるといふに付中書公の直話のうち其敏捷にて理非の明かなること一事をしるす昔朝鮮の聘使來り對州にて對話の時朝鮮國王の使も日本の上使も互に對座にて褥の上に坐し互に王命を對馬守を以傳ふこと也その時對馬守を中書殿の前へ被呼候而朝鮮國王平安なりや否兩使太義に思召との御意を傳ふる也其旨を對馬守かかの國の使へ達するとき兼而は兩使共に褥の上にて受る積なりたるを對馬守か中書公より御意をうくるとき平服したるさまに驚しか褥を下りて對馬守か傳ふる御意を承りしと也扱又同じ意のことを朝鮮王の命を對馬守もて上使にも申すことによし其時上使の褥より下たるか禮ならむか

褥上にあらむかとしはし大に迷ひ給ひしか忽におもひ給ふはこの禮は兼而對馬守を以兩國へ通し定なること也しかるに今かの國の使の褥より下りたるはかの國にては日のものことく君の御名代を敬ふことしらぬ故に對馬守かさまに驚て其儀をあやまちし也其儀を誤ちしものに我何を習ふへしとて褥上にて朝鮮王の使のことを受給ひし其時はいたくこゝろくるしかりしか事果て林大學頭其外共に中書公の才の人にすくれ其禮の儀に合ひしことをみなく感せしよし也これらは中書殿の夜話のうちおもしろきこと多かる中にことにすくれしこと也今の淡路殿はとしいたく違ひて中書公六十五六の時いまたわか衆にて被居たれば父上よりはなし被聞しやいかにとしるす也朝鮮の時御くら鑑御拜領の御うた即坐にたゝうかみにしるして内々は執政の人にも被見たるか終には上聞にもなりしと中書公の仰られき

武藏鑑おもひもかけぬ賜ものに躍りたつ野のこまいさむ也

武藏鎧はかくるといふまくらことは也この鎧サヌ金下にて廻り今のムソウ鎧といふものゝことく左右いつれへもかゝる也それ故にことにむさし鎧と取出してかくるといふ冠辭にすると也たつ野は公の城地といにしへ武藏國立野の牧あり貫之かうたに

相坂に引らむ駒を秋霧の立野かと社

何々といひしあと忘れたり六帖に載たるうた也その立野をとり合たる俳諧うた也文辭にも才氣の速なるかあらはるゝ也新右衛門淡路殿へはなして今の公の志を殊に引立られなは先代に同じき忠義のことも出来可申かと詳にしるす也

○十六日 くもり 一兩日已來日々の南風日々江戸の如し乍去さむさ俄に甚敷今朝は二十八度にゑ泉水の氷十分にふみわたらるゝ躰也三年來はしめて也○十二日に 一乗院宮に寒中に參る別に震殿と申候表を御居間のことき所の御通し御茶并御菓子被下るゝこと定例也御逢はなししかる

に例よりいさゝか待たるかとおもひし也しかし心にも不留位の事也然ルにきのふ儒者の貞觀政要の講義に出しに 御門主以之外の御けしき故奉伺たるにいやわれもきけよこの頃左衛門か寒中に來れり實は逢筈なれ共我儘して不快とていつも逢はぬ也これすら我氣の毒におもふ所也然ルにこの頃はしはし待たせりとか聞御用ある人を待する法やあるあまりの坊官らか不行届にあきれて今嚴敷しかりたりわれもこの躰みたらは予か氣を毒におもふことはよく左衛門の物語せよとの御事也とて儒者來り 御意を傳ふ右は少も心當といふ程のこともなく 宮のよく御心つかせらるゝ故のこと故に若御家來など此上の御叱りあるにおゐては御説として奉行參殿するとまてに申上ること濟たり御氣のよくつくは屢恐入ことなれ共御法中にはよほと嚴敷御かた也御諫など申せはよく御聞なさるゝよしなれ共不手際と偽あると御たゝり嚴敷故に御家來の恐るゝ也興福寺領之公事出入など多分は御陰聞故にあまり不正など少と申也全躰佛經にても

御聽聞可然旨每度夫となく御咄のときには申すなれ共貞觀政要のときももの講のかた御意にいるよし也御法中には御經文のかたよしとて御家來と密に談せしこともあれ共法義を御進め申候程之出家ならになしこれにみなこまりて當年夏頃より紀州一位殿御信仰の僧を被召候ふ法義御聞なさるゝとの風聞也法親王にはあまり御立派也

○十七日 くもり 寒氣大にゆるむ四十三度也きのふの氷八分通とけたり○明日御用日に付目安八十本出る○病人大によろし此ほとは三度宛食事いたし二椀ツ、も給て魚類も醫のゆるし故に少々は給る也こゝに心得になることあり三卿流にては下し專に而大黃をよく用ゆる也此度の醫ははしめは大黃を用ひしかして專に附子也大便の通し四十日はかりのうち只一度也尤小便は日々三度宛も通する也三卿とはうらはらにてもよく直ることあり老人などにはこゝろあるへきこと也此度の醫者のする所をもて三卿をみるにうらはらはら也いかなることか素人のしらぬこと也四十日

之内一度快通したりよき便多分に通したり定而格別によからむとおもひしに左にあらず却而其翌日まで悪かりし也四十日中給物もあれ共右は腹中にていかゝなるやしらす不可解事也され共一度も手をくれなく快氣しときのふよりはけふはよくとなる上は醫の薬はよしとみえたり母上の御療治のためと記也われらか三十年來みたる療治とは更に別也され共よくなる上は論なき也

○十八日 晴 三十七度の寒也庭へ鹿來る歩行の修行に四方へ追かけみたりいまた老たるとは覺へすまさかの御用には立ッ積也しかは七尺位の塀を飛こす也○此ほと京の奉行をめしたるにていろゝのこをいふ也其内に可笑は此度の御奉行になり京攝へ行てもあまりにひけをとらす其かはりにわれらか錢もとれす二ツよきことはなしと泊りの同心のはなし居たると也奈良奉行所は京都の下役のことし以前は京の奉行の陸尺手廻り博奕に負るとならへ來り中間部やにねこみ居て博奕のてらをしもらひ

歸ること例のことく也とわかこゝへ來り頃きゝしか御改革後故なるへし一度も來らず

○十九日 くもり 例の女犯僧耳彌手にあまるにより取計伺一段となりたるに與力共より書面を出し狂氣の躰に付快氣まで初瀬へ預置へきと之事に付もし已前之通初瀬の牢を破り而所司代か御老中等に駕訴等いたし候は、如何之心得に候哉たと書取を以申談いつれにも當年中にかたを附候へとの義申談たるにより與力共昨夜九ツまでかゝり牢問をしたるにいはすいまま少しきひしく御責被成早くゝなといふ故に與力共怒りて釣り上ケて嚴敷せしに如玉なる汗を落しとろゝのときものを吐たるよし夫を三たひしたるに終に白狀せむと云故にいや屢口を替に付今一段と申したるにいや上方ものとかひ關東ものは白狀すると決心しては急度する也おろしくれよといふ故におろしたるに湯なとのみて女犯之段無相違しかし遠嶋は用捨に預りたし夫は御慈悲を願ふ也肉食はいたさすと申た

ると也右に付牢屋敷より家來屢往來して八時に成たりよつて與力へは銘酒とかもに西門手つからくれられたる錦のかみ入を遣したり家來共にはわかねさけの相手させてねかしたり○よの中にあまのシヤくといふことありいさゝか夫に似たることあり易の☰天を下にし地を上にしたるは泰にしてやすく☷天を上にし地を下にしたるは否ふさかるといひてやすきのうら也そのわけ奉行之氣に支配向なり支配向の氣に奉行なり家來の氣に主人なり主人の氣に家來なり或はうり人の氣になりものをかふなとの類かの地天泰也いそかしき人ひまなる人のかたへよく行安否をとひ勢ひある人勢なき人へ手をさけ金もち貧人をうやまふ類みなよしひまなる人いそかしき人のかたへ行かす勢なき人勢ある人に手をさけす貧人金もちをうやまはすこれらもあしきとはいはすみなあれは豪傑なる人か正直もの也已を地天泰に置けば何事をもなし人よりの仕向は天地否にてうくるこゝろなれば間違ひあらず身さかゆく行ことの最上なかるへし當年の日

記年内に遣すことの納めなるへければ万世動かぬ目出度ことをしるしぬ
○廿日 古事記にやたのかゝみといふことあり夫に付品々の論あり本居
宣長か説によればかしろの八ツある鏡なるへしといふ也よつておもへは
ならの秋篠寺にも八ツ頭のあるかゝみありしと覺たり與力に尋させしに
こゝにては八ツ花かたといふなりいかさまにも八重さくらに似たるかこ
ときかたち也春日の若宮の神主千鳥三位かたをしらへもらひたるに日本
の古鏡といふものいくらも春日にありみな八ツはなかたにて大成は二尺
もあるものありと云也其内以前より神庫々とり出しあるを圖してみすへ
しといふ故に其神庫のことを問に春日は平重衡にも焼かれさりければ其
以前よりの神庫今以存しわけの分らぬもの一庫にみたり社人らには不分
故に興福寺之衆徒立合にて封をつけ置のみ其内にやけたるかゝみに 南
朝の内侍所のみかゝみといふものもありまことかしらすなとゝさもやす
くといふ也其内を一覽せは心得になるへきこともあらしとおもひてく

るしからすはわれにみせよといひ遣したりならの古物には驚く也頼朝頃
の物は一向にあたらしきか如く元興寺の塔は聖徳太子の建給ひしもの也
其頃のものいくらもあり大和の火事なき國故にかゝる目出度ものゝ存す
るとみえたり其内に家藏の類に千年余のもの多とは西土などにはあるま
しくおもふ也くらといふものはひの木のくれ木をくみ立て其土臺下とい
ふもの凡壹丈もありてふき通し也いはゝ高あしだの上へものをつみたる
かことし更に濕氣なし夫故に千年余のもの無事とみえたりしかし火事な
き國故也

○廿一日 くもりもちつき也ならにてはもちをつくに太鼓三弦にては
やしたてる也奉行所にあは哥うたふはかり也○醫師勝南院宮内興福寺之衆徒也病
人の事にあよく骨を折たれば酒のませたりこの男明快なる男にあはしめ
より辭することなく酒をのむことをろちのことし力自慢にあ腕押をした
きといふ也市三郎はわれより強けれとも兩手にても曾あ不叶くやしかり

ていろくすれ共終に不勝わか腹かくのことし故に酒多くいるといひて胸をひらきみするに二段目の相撲にても不及かことし市三郎つめりみるに腹をはれは爪たす雄壯人を驚しむ常に横廣かりの男故に丈たかくはおもはさりしにならの御役宅は京間にはあらねと江戸よりもかもる高ししかるを舌を出して自由になむる也はしめて丈の高きをも心附てきうにこの坊主の頭鴨居よりよほど高ければ年中あたまをはられ居てなま疵絶ることなしといふ也あまりにふとり強ければ丈高きをしらさりしもおさとわれといにしへならば勝南院は奈良の大悪法師といはるゝものなるへしといへはみなく大にわらひきわれらにこのからた此力あらは武術に大助となるへきを可惜法中也奈良興福寺の衆徒といふものは御祭禮等の時は畫かける辨慶かこくと頭をつみツケサム也短刀をさし侍に太刀を爲持ころもを着ていつる也され共肉食妻帯也興福寺の配當米を受内職に醫をなし手習などの師をする也けふは公事十口あり白洲より一旦引て中

食いたし又白洲に出る

○廿二日 微雪又晴風 昨夜は四時あまりに暖氣故にみれば六十度までにいたれりなみのつもりにはよぎあつ過て汗出る也めつらしきこと也夫のかはりけふはあかつきよりさむくして拂曉は微雪也金魚などかくのことくに水をかへらるゝならば浮上るへし六十度より三十四度位にさかるさむさならば三十段に近くかはる也

○廿三日 晴風 さむさ甚し九ツ前に三十一度也すゝりみな氷りたり佐渡にてもかゝるさむさはしらぬ也廿一日は暖に過ぎたるにいかなることによ○けふいしやの來るとておさとの香をたく也こはみやひに過たりけしからすといひたるに今市三郎か尻をひりたり其くさ堪へからす醫師に向ひ居るにおさとのあやしめらるゝのこゝろくるしければかくはものせし也といふ也市三郎昨今風邪也この男聊にても身に患ふることあれば天の下にたくひはあらしといふ臭屁をひる也あるとき儒生と予物語した

るに儒生の屢目などこすりたりき与風おもへは屁の臭氣殊に甚しいかに
も儒生と經義の論中放屁せしことくにて氣のとく故に次之間に市三郎あ
りやいかにといへはこゝにさむらふといふ屁は汝かといへはしかりとい
ひき儒生の目を屢たゝきは眼にしみしかとおもへはいとおかしこの節
こたつのうちにて放屁のことをいたく禁しめ置故にひそかに掌のうちへ
もらして外へ握すてたるにおさと咽ひて父上へ申さむとて戯むるゝ也こ
のうたへをさはきはきは眞の御なら奉行なるへし市三郎かときははいたち
狐などの類なからましかはけに天の下にたくひなき屁なるへし

○廿四日 晴風さむし われこの頃歎息していふは江戸にては書物の議
論のことおれは彰常して佐藤へもやり又良齋修理友野先生夏かけ翁等不
絶參らるれば問こともあり其外友も來りて論することもありしかならへ
來りては一の村學究のみにて問ふへきことあらず例の夕霧先生なれば人
は温厚なれ共一わたり書院講釋詩題を選はする位の事也市三郎はこの頃

八犬傳の粗大意に通するといふ位の事御兩親様は書物はなし御嫌ひ也さ
し引うたのてにはの論にてもするは朝夕おさと一人也しかるに此人三十
日之内にたゞの一日も快ことなく多く少々のことをいふ也一兩月のうち
に一度のけるゝは勿論平日にてもともすれば涙くみ氣重にてしかゝ
とうたの議論などとしても只おりゝ返事する位のことばかり故に先ツは
相手にならずよつてはなしはつきたるかことし夫故に朝夕に書物にかゝ
り切にて古人と物語する氣にて樂しむ也歎息中格別に學問の出來るまた
一樂也こゝにいたり獨身同然也

○廿五日 くもり 御用日いろゝ用多し○十二日附之書狀來る先以御一
同母上様被爲初御機嫌克と之御事恐悦之至乍去少々御持病にて御床に被
爲入候由例之狂女一件に付御配慮故かと深恐入る也夫にしても可憎は狂女
也いつれにも先ツ五月頃までは新右衛門の御任せ申候扱々氣之毒千萬也
新右衛門の世話之上に世話相懸候段絶言語候義に有之候くれゝも狂女

不届至極也この狂女へ幼年之節を懸ケ候入用いか計なるらむみな水の泡也この入用も嚴敷はするなれ共親之愚成所よりしていかにもして身を全せむ様となしたる事也しかるを一朝のいかりに其身を忘れて諸親族をしてかなしましむるにいたるいか成事にや可憎事也右に付考あり子などを少しにてもよくせむとおもふならば其金を以窮民を救へしよくせむとおもふことみな大害となる也譬にいふはいかなれ共堯の徳をいふに則武則文といひたれば書物にはなけれ共天下とならせ給ふまでに身をくるしめ給ひしことなるへしされ共よからぬ子なれば天下はゆつらせ給はぬ也しかるを凡夫のあしき子あるに夫を只よかれとおもひていろくする故に大害を生ずる也○厠へ落たる奇事也酒などのむはよくこゝろ得置へき事也可恐○岡崎にて乗馬のこと承りたしさをよき馬のあるなるへし其かはり下手にはのれぬ也其味追承りたしこゝにて馬場は大名にもめつらしき馬場となりたれ共馬病氣にて一眼になり其上老馬にてのれす與力の

大閣殿下
東照宮へ
下を御譲
は万世の
堯なる帝
た可憐も
さ秀頼も
立派なる
名に於て
いである
しでるへ

馬を借のりみしに何分下直の馬故不面白候此事には當惑也馬をうり取替むかとおもへと佐州其外へもつれ彰常の至秘藏の馬なれば不便にてうられす其まゝにいたし置也昨年まではまだ力もありしか病後あしき借馬のことくなりし也○新右衛門盛につとむる様子よくわかる也され共可恐のかきり也泰の卦の地天の圖前にしるしたるにて大意御承知あるへし序にいふアマノジャクといふことを前の日記に記したるか夫は古事記にある天ノ佐具賣といふ女神のこと也天の邪鬼にはあらぬ也天ノサクメのメは女の事也

○廿六日 くもり けふ西本願寺之使僧正順寺といふもの京都より能々來り面謁を乞ふこの僧以前輪番をつとめ同寺は頼に付わか逢しこともあるもの也と也面は不覺寺号もしらす何事かと遠寺之使僧承りたるに御門主時候御たつねなざる扱内々は改派のこと寺社奉行所願置たるか長く相成埒明かすこまる也しかるに近頃新右衛門懸に相成たる淡路守殿之

改派を一件何分早くかた附の様子申遣し吳と其筋より内々命せられたる
との事也右に付正善寺藝州か備後國正專寺其外之寺号之書付を出したり
よつてわれいふは京都より能々之御使僧其上早く相濟候様と之事故理非
のたのみにはあらねとも新右衛門夫等之義至る堅く且われ勤中之ふり合
も有之候間其義は及斷候義に有之候とて右之書面は返し又手土産として
菓子持參せしかとも是又返却したりあまりのことに付段々さくりみるに
西門は去年ならへ被參候節我に被逢候節調役之節世話に相成候由等禮
を被申候手つから鼻昏はさみなと被吳たり右等之故を以わかことを知
られ新右衛門之續等を以西門の直考かとおもはるゝ也拙僧も輪番をも勤
たれば公邊の御手かたきはしる居なれ共其筋を被申付無余義なと、いひ
たり此事は後日のためなれば新右衛門可然御心得可被下候右之通十三里
使僧を出し百里外之親類のことをたのむといふにて新右衛門の身分油斷
のならぬ可恐ことをしられ慎ふかく用心あるへしきのふの日記とけふの

こと考合ても新右衛門身分大切也少も油斷あるへからす只々敬を主とし
て入念つとめ下るゝ様と夫而已のり居ること也かくも人は縁をもとめ
手を廻す也少も油斷すへからす○所司代より御下知もの數口下る獄門火
罪其外十七八人あり是住といふ所化も御下知あり脱衣之上肆中追放と御
差圖あり遠嶋と伺たる也

○廿七日 晴 白洲は出る吟味物之外落着物十五口あり牢内もの三十六
人あり今朝死罪獄門火罪ありひる後より白洲は三度出る與力共このほと
の出精ことに甚く昨夜も四ツを打候ねさけ五ツをはしめたるとき順作
來り筆頭與力今以白洲は出居るといふに驚れて菓子茶など遣したり此一
件なら市中之豪家之もの吟味也今朝きくに一向かた附かすわれ聞かむ
とてけさ白洲をしたり主人たるものは病人之由に白洲は出なから無言
也下代に軍師ありていろゝのこをいふ也そのものゝ不束を押へて主
人の名代としていはむは可也主人了簡外のことをいひては其方の出入也

其方之出入として主人之親類を彼はいふは不届也同心共あれかの不届も
のをシハレといひてシハラせてさて親類實意を以懸合委細は與力共より
尙可申聞とて引かせたり夫にて忽に一件濟口に成たり實は軍師はみなこ
の手代とみえたり其病毒をとりし故に事整たる也主人はしめ一件之もの
より御慈悲願をするによりて出牢させたりいにしへも敵の使者軍師とみ
えたるを察して首を切たるに其敵即坐に降參せしことあり其故智を用ひ
たる也この出入三年に近くなる一件也

○廿八日 くもり としの暮にてあるものゝかたへ金子をかりに来れる
ものありとて彼はおしのつよきやつなといふに与風おもふことありお
しのつよきといふことは澤庵のおしのつよきことにもあらし武州に忍の
城あり堪忍の忍の字をおしとよむことふるきことゝみえたりされは忍ひ
つよく來りてものをいふことなるへしとおもひければ忍のつよきをいた
くなあしくいひそ堪忍の字の修行するなるへしとて笑たり左傳によから

ぬ人を忍人といひたるもあしきことにたえ忍ふ人也人情にならぬことを
する也忍は心へ刃をあてたることくこゝろくるしきのかきりならては忍
とはいはれぬ也よきにもあしきにも遣ふ字也凶徳惡徳の徳のことし

○廿九日 はれ 暖にして氷なしとしのくれを

寧樂のさとやすけく老を樂みて立歸こむはるをまつかな

吉野看櫻如昨日白駒飛走忽將昏梅花苦雪癯忤牖松竹穿冰植邸門

薰菊烹椒鄉俗態搗黍擊鼓土風喧官廳斷獄纒休歇閑暇讀書解漚煩

千餘訟獄二三殘囹圄如空心自寬精粹克勤多士力待春老叟樂平安

この七絶は當年の公事數惣高千貳百余之内十二月以來之公事二十はかり
來年へ越したり牢内貳百六十余之内十八余十二月廿日已來召捕もの來年
へ越たりみな與力同心之出精故にかく詩に詠したる也○今日青山伴右衛
門以下之人々來るとも當年のことゝは不存に俄のこと今日大に騒たり
書役其外にはみな二百疋宛遣す青山石川は料理を出す積なりしに石川

はいそきて歸りたればこの人はいかゝなる料理を廻し夫は墨五挺添遣したり青山八代には酒食差出し上製倣唐墨五笏を遣しぬ川名夜中又來る新右衛門并鍔作別段にいたしくるゝ禮をのへて鍔作の内々たのみ也兩御隠居様へ拜謁を義申聞父上御逢あり母上は御斷也けふ尋くれたる人々にはみな二百疋ッ、遣す三兩貳分懸りたりこれも 君恩さてゝ難有以前はもらひ候ものを遣すこと難成事也○遠藤を忤へたのみ新右衛門は進上の革くらは別製也いかにならちや也とも是はよろしといふへし實の説承りたしこれは眞田信州よりたのみにて元組大坪道禪先生の鞍眞田家にもち傳の品を摸したる也夫故に常のくらも別段に大ふりに革も又別段にかゝる也馬を先生いかにいふらむ承たし前後の間二百年來のものに見合すれば至る高し右に付馬上にて太刀打其外によろしと承候キツ、ケ等常にこと也其御合にて御製作あるへし右に似合候ふち五六の鎧か或は小かた無地の最上鍊鍔のあふみ御かけ可被成候くつ輪は直に出來候よ

き鎧御穿鑿あるへし其内見出し候は、呈上いたし可申候已前進し候くらの類にあらずよく御鑿定あるへしわれ組頭格より九年目に牽馬を用ひたり人々みなはやしといひたり支配勘定を十八年目也右迄は新右衛門は進上いたし度其上は新右衛門別段に自身のよき例を御製し候へ○夕かた中野より書狀來るいろゝのこと受て其末へ中野は母上と御同年かとおもひければ

いにしへにまれなるとしを万世のはしめと君は明日迎らし

と記し遣したり○一乘院宮を 御弟君

當禁より内々被下たるとて氷欸冬といふ菓子内々被下たり右之内當禁を 召上りと承候を かしこきのかきりと母上へ奉るこれも 上之御恩也あなたうと

如此いたし候得共ねり羊かむなとちかひ江戸迄はもち申間敷其上味もまたいとゝ恐多ことなから至る薄きこと故に目かた計にゝく

さり候ものを江戸へあけ候もいかゝと差上不申候

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 江戸, 候, and 申候）

昭和八年十月二十日印刷
昭和八年十月廿五日發行

川路聖謨文書第四
非賣品

不許
複製

編輯代表者 東京市本郷區駒込東片町三十番地 藤井甚太郎
東京市四谷區新堀江町三番地 日本史籍協會代表者
發行者 早川良吉
東京市京橋區湊町三丁目八番地一
印刷者 高橋赤次郎
東京市四谷區新堀江町三番地
發行所 日本史籍協會
電話四谷三二八七番
振替東京三九四五番





